

学内広報

for communication across the UT



特集： ■ 大学発→学校行き
大学発教育支援コンソーシアム推進機構 (CoREF) の活動
■ 第8回ホームカミングデイ開催！

2009.12.17

No. 1394

「小・中・高等学校の先生方に大学から生まれる新しい知識やその教育方法を発信し、みんなで教育の質を高めること」及び「その目標に賛同する大学・機関でつくるコンソーシアムの活動を推進すること」の2つの目標の達成に向けて、平成20年11月、東京大学に大学発教育支援コンソーシアム推進機構が設立されました。

他大学、産学等との全国的な連携組織が「大学発教育支援コンソーシアム」です。その取りまとめ役として、東京大学に「大学発教育支援コンソーシアム推進機構」があります。ここでは、東京大学として独自の小・中・高等学校支援活動もさまざまな形で行っています。コンソーシアム及び推進機構の支援を行うため、大学院教育学研究科に「大学発教育支援コンソーシアム室」が置かれています。



大学発教育支援コンソーシアムは、小宮山前東大総長らが教育再生会議において提案し、平成20年度から活動を開始したもので、平成20年7月12日(土)東京大学においてキックオフシンポジウムを開催、右のような行動宣言を発表しました。



【左から】杉山寛行名古屋大学理事・副総長、土田健次郎早稲田大学常任理事・副総長、門川大作京都市長、郷通子お茶の水女子大学学長、小宮山宏東京大学総長、西村周二京都大学理事・副学長(※いずれも当時)

【大学発教育支援コンソーシアム行動宣言】

平成20年7月12日

1. 多様な教員養成の仕組みと高度かつ継続的な研修を提供する。

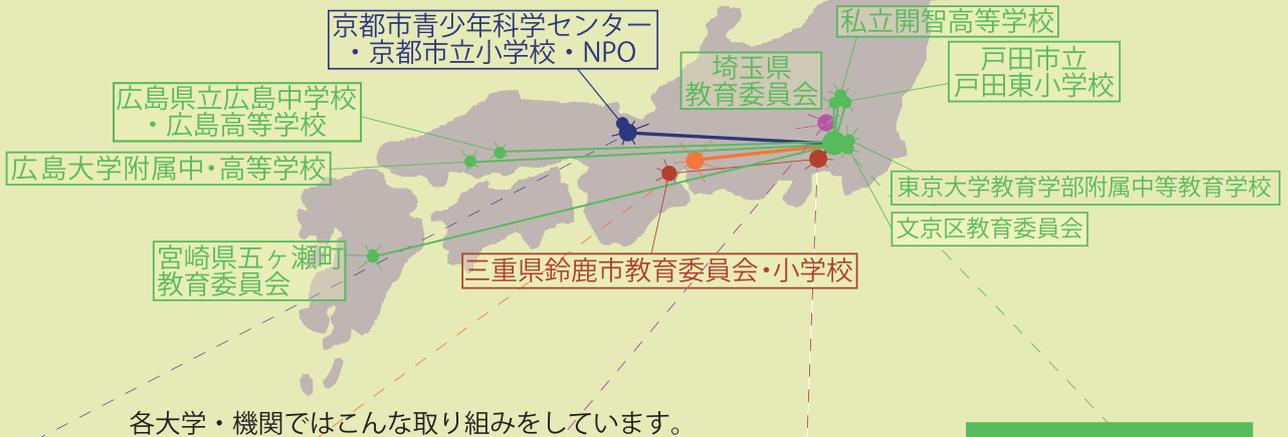
短期集中型など多様な免許取得のためのコースを提供し、教員集団の多様化を図るとともに、構造化された先端の知や社会変化を反映した研修を実施し、教員の専門性の向上を支援する。

2. 大学の知により教育内容の変化をリードし、教科内容の縦と横を連携する。

既存の教科・配当学年にこだわらず、小学校から最先端科学までを見通せるように教科内容の縦と横を連携し、IT技術を活用した教材開発を進める。

3. 大学を核としたネットワークのネットワーク (Network of Networks) として、成果を共有・発信する。

大学を核とした地域のネットワークを束ねるネットワークとして、様々な課題の解決に向けた多様かつ先進的な取組を可視化して共有し、試行と効果の検証に取組む。企業・行政・NPO法人等の参画も得て、社会総合力で学校教育を改善する。



各大学・機関ではこんな取り組みをしています。

京都市教育委員会 京都大学
教材、新教育システムの開発及び検証

名古屋市大学
高等学校教育と先端知を融合する教材開発

お茶の水女子大学
小・中学校での理科教育支援、教材開発

早稲田大学
日本語教育活性化のためのコーディネータ養成

東京大学
① 知の積極的情報提供
② 知のインタラクティブなやり取り
③ 知の使い方発信

① 知の積極的情報提供

東京大学の知のリソースの中から、学校で役に立つ情報を1ヶ所に集めて発信します。

● 東大知を活用したい方のために、ポータルサイト上で本学組織や教員による教育支援についての情報を提供します。



「学術俯瞰講義」「UT OpenCourseWare」「TodaiTV」「公開講座」などの概要やビデオが一覧できます

【発信内容】

- 小・中・高等学校向けのテキストや教材
- 教養教育や一般向け公開講座などのビデオ画像や教材
- 出張授業や研修会、ワークショップや研究室訪問等への受付窓口案内
等々

推進機構「発」コラム① 知を手渡す

東京大学には「今、生まれたての知」から「人類共通の古典的な知」まで、たくさんの知があります。より多くの人々が大学の知を自分の知に組み込んで、次の世代に手渡していくことで、私たちのコミュニティそのものの知が増えてゆきます。このような考えのもと、本学で行われている教育支援プロジェクトを広く教育界・社会一般に紹介し、その活用を支援します。

● 例えば本学では、以下のような活動が行われています。推進機構では、これらの活動をシンポジウム等で紹介したり、共同で実施しています。

学問の全体像をわかりやすく発信

「学術俯瞰講義」は学問の全体像を俯瞰する講義として、教養学部で人気のシリーズです。この講義をもとに、より広範な人たちに必要な基礎知識や参考資料を加えテキスト化し、教育現場や広く社会一般で利用可能にして提供します。

大学総合教育研究センター
学術俯瞰講義室
藤原毅夫特任教授



生命科学研究の最先端と教科書の関連づけ

生命科学は、最近急激に発展しています。本プロジェクトは、この分野の用語が大きく変容していないことを利用して論文などの意味構造をオントロジーを使って表現し、最先端の学術論文と教科書の内容の共通点を提示して、若い研究者の研究意欲を高めます。

総括プロジェクト機構
クレイネス・スティーヴン准教授



Created by Takashi Makino

高校物理の授業に役立つ基本実験講習会

教養学部附属教養教育開発機構(KOMED)と物理教育研究会は、協力して「高校物理の授業に役立つ基本実験講習会」を実施しています。その体験を確実に実施できるよう「見て体験して物理が分かる実験ガイド(DVD付)」を作成し市販もしています。DVDのみは希望者に無料*で配布しています。*送料負担

教養学部附属教養教育開発機構
兵頭俊夫教授



大学生と小学生のための工学理解推進プロジェクト

工学を専門にする学生と教育を専門にする学生が小学校や中学校などの教育現場に行き、子どもが理解できるように工学などの専門知識を説明します。教育現場と研究拠点との相互のやり取りを通じて双方のコミュニケーション能力を高めます。

大学院工学系研究科 工学教育推進機構
鈴木真二機構長



② 知のインタラクティブなやり取り

教室で児童・生徒が学び合う新しい授業の実践方法をインタラクティブに発信します。



このポータルサイトでは、東京大学の知のリソースを探索したり、協調学習によるワークショップやモデル授業の内容を見たり、それらの教案や教材をダウンロードして試したり、協調学習がうまくいく仕組みについて学習科学を学んだりすることができます。

CoREF harappa ページでは、実践記録に基づいて、授業を実践する人とコンテンツの専門家、学習科学の専門家が双方向のやり取りをしながら授業改革や学校改革を進めていきます。
※参加には、推進機構との連携協力関係にあることが必要です

CoREFポータルでできること 「見る→使う→参加する」

利用者と、コンテンツ・学習科学の専門家が
インタラクティブにやり取りします

推進機構「発」コラム② 学び合いを導く協調学習

推進機構が推奨しているのは、数人ずつグループになって調べたことを統合したり、問題の解き方や答えを比べあったりしながら学ぶ協調的な学習です。狙いは、将来必要になった時にちゃんと「使える」知識を一人一人の学習者に獲得させること。学んだことを知っていることと結びつけ、自分のことばで説明し、まわりの人と討論して少しずつ自分の理解を深めてゆく過程を支援します。



③ 知の使い方発信とこれからのモデル事業

協調学習をベースにした体験ワークショップ、研修やモデル事業を行っています。

推進機構では、これまでに右のようなワークショップや研修会を行い、小・中・高等学校の現場での知の使い方、作り方を発信してきました。

今後はこれらの動きを促進し、下のように実践研究を通じた学習理論の再構築にも挑戦していきます。

現場の先生方と一緒に授業を検討し、現場の先生方自身が学習科学を活用して授業を設計できるよう支援する取り組みも始めています。

学校現場を多様化するモデル事業

コンソーシアムの行動宣言の実現に向け、コンソーシアムのネットワークを生かして、今後、以下のような活動をモデル事業として推進していきます。

新しい学び方として「協調学習」による知の構造化の手法を教育委員会と探る試み

- ・埼玉県教育委員会、同県立総合教育センター
- ・東京都文京区教育委員会

地方の自治体の教育委員会を中心に、町ぐるみでの授業改革や地域改革を行う試み

- ・宮崎県五ヶ瀬町を中心とした地域ネットワーク
宮崎県五ヶ瀬町の2つの中学校の合同授業で「高い山の上でも水は100℃で沸騰するか」という課題について、「三態変化」「気圧と沸点」「山の高さ気圧」の3資料を東大と一緒に準備し、「ジグソー法(コラム③参照)」で理由も考えるモデル授業を行いました。

大学と小学校をつないで、双方でコミュニケーション能力を育成する試み

- ・東京大学大学院工学系研究科工学教育推進機構 + 大学院教育学研究科 + 埼玉県戸田市立戸田東小学校 他(本誌3ページ参照)

学校全体で授業の質向上を目指す試み

- ・東京大学教育学部附属中等教育学校
- ・広島大学附属中・高等学校
- ・広島県立広島中学校・広島高等学校

社会人が小・中・高等学校の先生として活躍できる基盤づくり

【教育関係者・一般向け半日ワークショップ】



- H21.2.28 第1回「水」
- H21.5.30 第2回「手」
- H21.6.28 第3回「学習科学」

「ジグソー法(コラム③参照)」により、大きなテーマについてみんなの考えをまとめる体験を通して、学びとは何か、科学とは何かについて語り合いました。

※この様子は平成21年5月30日NHK総合の夕方のニュースで放映されました。

【出張研修など】

H21.7.9 広島大学附属中・高等学校 出張研修

全校の先生45名を対象に、学びの科学の基礎と「水」のワークショップを実施して、グループ毎にポスター発表を行って授業づくりにつなげました。

H21.8.31 開智高等学校 一日職員研修

全校の先生と来春から先生になる人たちを対象に、学習科学の基礎から協調過程によって理解が深まる仕組みについて再検討し、秋からの授業作りにつなげました。

H21.9.18 埼玉県立総合教育センター 協調学習研修

指導主事の先生方を対象に駒場にある支援型協調学習教室 KALS で協調過程によって理解が深まる仕組みについて再検討し、協力的な学習方法を授業改革につなぐ方法を検討しました。

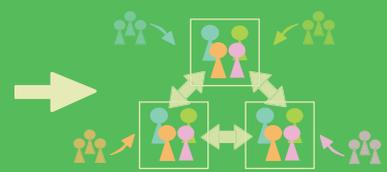
推進機構「発」コラム③ ジグソー法とは 協調学習の実践方法の一つです。

【エキスパート活動】



それぞれのグループで一つの視点を学び合って

【ジグソー活動】



グループを組み変えて課題を解き、わかったことを発表し合います

連携先募集：

今後、企業内人材育成・教育支援組織、学会、大学や教育委員会等教育機関、校内機構や部局との連携を強めていきたいと考えています。ご関心がある場合、まずはメールでご連絡ください。



RA[リサーチアシスタント]募集：推進機構では若い仲間が大活躍しています！

イベントの運営や企画には、RAが中心的役割を果たしています。専門分野は工学系から教育系まで様々です。参加者随時募集中です。興味のある方はご一報ください。

大学発教育支援コンソーシアム推進機構(教育学部 大学発教育支援コンソーシアム室)

TEL: 03-5841-3682 (内線 23682) E-mail: info@coref.u-tokyo.ac.jp

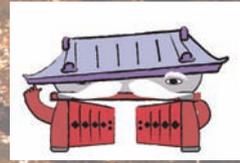
<http://coref.u-tokyo.ac.jp>



CoREF

検索

特集



第8回ホームカミングデイが開催されました！！

11月14日(土)、卒業生の祭典、ホームカミングデイが本郷キャンパス及び駒場キャンパスで開催されました。当日はあいにくの空模様ではありましたが、多くの方にご来場いただきました。当日の様子をご紹介します。

特別フォーラム 「新技術が切り拓く日本の未来」

三菱総合研究所理事長 小宮山宏氏をキーノートスピーカーに迎えての基調講演と、新技術に取り組む我が国を代表する企業の経営者3名(東海旅客鉄道株式会社代表取締役会長 葛西敬之氏、シャープ株式会社代表取締役社長 片山幹雄氏、三菱自動車工業株式会社取締役社長 益子修氏)及びモデレーターの東大特任教授 村澤義久氏によるパネルディスカッションからなる「新技術が切り拓く日本の未来」が開催されました。

世界に誇る日本の最先端技術、環境および省エネ技術などに積極的に取り組んでいる3企業にプレゼンテーションをしていただき、将来への展望について熱く語っていただきました。最後に会場からは多くの質問が飛び出し、大いに盛り上がり、成功裡に終わりました。



歓迎式典

歓迎式典が開催され、濱田純一総長の挨拶、張富士夫赤門学友会長(トヨタ自動車株式会社会長)の挨拶のあと、小島憲道卒業生室長からの近況活動報告があり、最後は音楽部コールアカデミーのリードで「ただ一つ」を斉唱し締めくくられました。



本郷いちよう藝術祭

安田講堂において、今年も「本郷いちよう藝術祭」が開催され、音楽部管弦楽団、和太鼓グループ「彩」、柏葉会合唱団、音楽部コーラアカデミー・アカデミカコーラ・コーレティツィア、東大同窓会連合会主催による演奏等がありました。彩の和太鼓演奏では講堂内に迫力ある音が響き渡り、また、東京大学音楽部として初めて女性合唱団「コーレティツィア」が発足し、この日に合唱を披露するなど、観客を楽しませていました。



東大落語研究会寄席



毎年恒例となった東大落語研究会寄席が法文1号館21番教室で行われました。OBの方々が円熟の技を披露し、教室中笑い声が響き渡り、今年も大盛況の催しでした。

懐徳館一般公開・お茶会



東京大学の迎賓館と言われている懐徳館が当日一般公開されました。東大茶道部によるお茶会も行われ、紅葉し始めた庭園の木々を眺めながら、お茶を楽しむ姿がありました。

各種イベント・同窓会



各学部・研究科・研究所や電気系同窓会、さつき会、ワンダーフォーゲル部、科哲の会、東海銀杏会など、多くの講演会や懇親会が行われました。

現役学生によるキャンパスツアー



現役学生がガイドとなり、赤門、三四郎池などの各名所のみならず、あまり知られていない東大の見所なども案内していました。

駒場キャンパス



駒場キャンパスのホームカミングデイは、昨年建築協会賞(BCS賞)を受賞した駒場コミュニケーション・プラザでのオープニングセレモニーで幕を開けました。山影 進教養学部部長の挨拶に続いて行われた、第6回教養学部選抜学生コンサートでは、スタインウェイフルコンサートピアノを奏でるピアノ三重奏曲など5曲が演奏され、圧倒的な曲の響きに会場の聴衆が魅了されました。恒例となった「駒場の樹木を楽しむ会」では、梶 幹男北海道演習林長による「東京大学北海道演習林が目指す『理想の森』づくり」と題した講演会が行われた後、梶先生の引率によりキャンパス内を散策しながら樹木へのネームプレート取り付けが行われました。

また、木畑洋一名誉教授による講演会『長い20世紀』の世界史像や桂 利行名誉教授による講演会「デジタル信号の理論と代数幾何学」には、卒業生にとっても興味深い話に多くの聴衆が集まり、駒場博物館では特別展「観世家のアーカイブー世阿弥直筆本と能楽テキストの世界」、駒場図書館では企画展「造船秘伝書の世界」が終日催されました。夕刻のレセプションはベテラン会と合同で行われ、大先輩方から最近卒業された方までが、駒場の過去・現在・未来を語り合いました。当日は、この他にも各学科の同窓会が開催され、のべ参加者数455名という多数のご参加をいただき、盛況のうちに一日を終えました。

【周年幹事のお願い】

学部卒業40周年(昭和45年)、30周年(昭和55年)、20周年(平成2年)、10周年(平成12年)卒業生の方は、来年度の周年幹事になります。周年幹事としてホームカミングデイのPRや、同窓会を企画していただくなど、お手伝いしていただく方を募集いたします。今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

来年のホームカミングデイは、**2010年11月13日(土)**です。

【問い合わせ先】
本部卒業生グループ (内線21216)
E-mail:tft@adm.u-tokyo.ac.jp



NEWS

秋の紫綬褒章受章

江頭憲治郎名誉教授、宮園浩平教授、中村栄一教授、神野直彦名誉教授、福山透教授、米澤明憲教授、荒川泰彦教授が、本年秋の紫綬褒章を受章いたしました。

江頭 憲治郎 名誉教授 (大学院法学政治学研究科・法学部)

江頭憲治郎先生（現早稲田大学大学院法務研究科教授）が、商法学研究における功績により、本年秋の褒章において紫綬褒章を受章されました。



江頭先生は、商法学の分野において、徹底した機能主義の手法を用いるとともに、ファイナンス理論などの隣接諸科学の研究手法や実務に関する緻密な実証的手法を取り入れ、これらを基礎として解釈理論を革新されました。

商法学のうちの会社法の領域では、小規模閉鎖的な会社や親子会社における会社法の適用のあり方に関する法人格否認の法理の研究から出発され、その後においても多面的にそれまでの会社法理論を革新し、最近の会社法の改正の基礎を提供する研究を展開されました。その代表例の第1として、オプション価値に着目した新株予約権の発行規制があり、江頭先生は、商法研究者としてはじめてオプション価値に着目した発行規制のあり方の理論的基礎を構築されました。第2に、会社の合併について、交付金合併を認めるとともに、これを認める場合に会社から閉め出される株主に交付される金額の公正さの基準や反対株主の株式買取請求権における買取価格のあり方についての立法論的な提言をされました。以上の2点の改正は、2005年等の近時の会社法の改正でも、実務に最も大きなインパクトを及ぼした改正であり、江頭先生の研究なしには実現できなかったものといえるものです。また、会社法研究の集大成として2001年に刊行された体系書である『株式会社・有限会社法』（2006年以後『株式会社法』と改題）は、研究者と実務家の双方の必須の参考文献として大きな影響を及ぼしています。

商法のうちの企業取引法の領域でも、江頭先生は、現実に行われている重要な企業取引について、使用されている契約書式、約款、国際団体の標準的ルールなどを幅広く実証的に把握した上で、法的な重要問題を解説するまったく新しい内容の体系書として『商取引法』を刊行されるなど、この領域でもそれまでの研究水準を一挙に高める成果を上げられました。

江頭先生の受章に対し心よりお祝い申し上げますとともに、今後のご健勝をお祈りいたします。

(大学院法学政治学研究科・法学部 山下友信)

宮園 浩平 大学院医学系研究科・医学部教授

宮園浩平教授（大学院医学系研究科・医学部）が「TGF- β シグナルの研究」におけるご功績により、2009年秋の褒章で紫綬褒章を受章されました。



宮園先生は医化学の分野において、細胞の増殖や分化を調節する因子である Transforming Growth Factor (TGF) - β とそのファミリー因子の研究に努め、それらのシグナル伝達機構と役割の解明における先駆的な研究成果は国際的に高く評価されています。

宮園先生がスウェーデンで TGF- β 研究を始めた当初はまだそのシグナル伝達経路はほとんど明らかにされていませんでしたが、受容体や細胞内シグナル伝達因子の同定を通じてその全容の解明に多大な貢献を果たしました。またその後 TGF- β ファミリーシグナルの細胞の発生と癌化における役割の解明を進め、特に癌の基礎研究の発展に優れた業績を挙げました。さらに、現在ではそれらをもとにした臨床応用に向けた研究も積極的に進めておられます。

現在は日本癌学会、生化学会、分子生物学会で要職を歴任されながら、本研究科においても副研究科長を務められるなど大学内外で多忙を極めております。その中でも宮園先生は医学系研究科分子病理学講座を主宰し、研究活動を積極的に継続するとともに、熱心に後進の指導にあたられています。

研究室一同、ご受章を心よりお喜び申し上げますと共に、今後益々の研究のご発展を祈念いたします。

(大学院医学系研究科・医学部 渡部徹郎)

グローバル COE プログラム「理工連携による化学イノベーション」の拠点リーダーである化学専攻の中村栄一教授が、本年秋の褒章発令において、学術、芸術、技術開発等の功労者を対象とする紫綬褒章を受章されました。

中村教授は永年にわたって、有機化学を基盤に、物質科学からナノ科学に渡る化学の広範な領域で独創的な研究を先導してこられました。最近では、我が国の今後の科学技術政策における一つの方向を示す「元素戦略」を提唱し、鉄やマンガン等、ありふれた金属を用いて、斬新な触媒反応を実現する研究で世界をリードしておられます。また、長年培ってきた有機合成化学の実力を駆使して、フルレン誘導体や π 共役系有機分子などの新しい分子をつくりだし、その分子構造の中に新しい機能を見つけ出すことに尽力してこられました。さらに、エネルギー問題、資源問題を見据え、分子としての特徴を生かした新しい構造の有機薄膜太陽電池や有機 EL 素子を開発することにより、社会貢献を目指した研究を推進されています。

その一方で、科学技術振興機構 ERATO「中村活性炭素クラスタープロジェクト」を率い、単一有機分子の動きや反応を電子顕微鏡で観察することに世界で初めて成功されました。これは、まさに化学者の夢の一つであり、「世界観を変える」とセンセーショナルに新聞報道されました。このように中村教授は、基礎研究分野においても目覚ましい成果を挙げておられます。

これまでに、日本 IBM 科学賞、アメリカ科学振興協会フェロー、日本化学会賞、英国王立化学会フェロー、独フンボルト研究賞、アメリカ芸術科学アカデミー外国人名誉会員等、数々の栄誉に輝いておられ、2010 年には、アメリカ化学会賞のご受賞も決まる等、国際的に活躍しておられます。今回の褒章を契機に、さらなる研究のご発展をお祈り申し上げます。

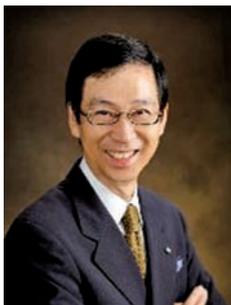
(大学院理学系研究科・理学部 長谷川哲也)

【写真撮影：柴田昌勝】

神野 直彦 名誉教授 (大学院経済学研究科・経済学部)

神野直彦名誉教授 (現 関西学院大学教授) が、「財政学研究」におけるご功績により、本年秋の褒章で紫綬褒章を受章されました。

神野先生は、政治、経済、社会を包摂する社会全体の文脈の中で財政現象を分析する財政社会学の発展と体系化に多大の貢献をされました。この功績によって、先生はかつてゴルトシャイ



トやシムペーターによって提唱され、1980 年代以降、世界的な財政危機の中で、再び脚光を浴びることになった財政社会学を、日本において開花させる道筋をつけられました。

神野先生はこの財政社会学の観点から財政史、福祉国家論、地方財政論、社会保障論の各分野においてつぎつぎと独創的な実証研究を行ない、学界の共有財産ともいえるべき金字塔を打ち立て、多くの研究者を育てられました。

例えば、現金給付や対人サービスが、欧米のように中央政府支出を通じてではなく、企業と地方自治体という 2 つのチャンネルを通じて供給されている点に日本の福祉国家財政の特質があることを解明されました。

また現代日本の国・地方財政関係を、歴史的視点を縦糸に国際比較を横糸にして検証し、わが国の特徴が「集権的分散システム」であることを解明されました。こうした貢献により、エコノミスト賞 (『システム改革の政治経済学』)、石橋湛山賞 (『地域再生の経済学』) 等を受賞されました。

理論と歴史観を裏づけとした神野先生の政策提言は、日本の地方財政、とりわけ地方分権改革にも大きな影響を及ぼしたと評価されています。1995 年に地方分権推進委員会委員に就任して以来、ほぼ 10 年にわたり日本の地方分権改革の税財政面での舵取りを行われた後、2008 年 10 月総務省地方財政審議会会長に就任して現在に至っています。

このように神野直彦先生は日本の財政学の発展を終始リードしてこられた代表的研究者であり、その功績に対して紫綬褒章の栄誉が授けられましたことは慶賀に堪えません。

(大学院経済学研究科・経済学部 持田信樹)

福山 透 大学院薬学系研究科・薬学部教授

福山透教授が、化学系薬学、特に天然物合成化学における卓越した合成ルートのデザイン、またそれを実現するための新規反応開発などにおいて貢献が認められ、本年秋の紫綬褒章を受章されました。心よりお祝い申し上げます。

福山先生は、複雑な生物活性天然物を研究対象とし、卓抜な合成計画とそれを実現させるための新規方法論開発によって、創造性豊かな全合成を次々と達成されております。先生の研究成果から代表的な一部を挙げるだけでも、チオエステルからアルデヒドやケトンへのパラジウム触媒を用いた変換法、銅触媒を用いた芳香族アミン合成法、またインドール骨格の新規構築法、さらには 2-ニトロベンゼンスルホニル基を用いた二級アミンの一般合成法などがあります。またこれら汎用性の高い方法論を組み合わせることで実現された



(+) -leinamycin、(-) -CP-263,114、(+) -ephedradine A、(+) -duocarmycin、(+) -vinblastine を始めとする様々な独創的全合成は、新たな合成の考え方を提示した傑作との評価を得ており、今後の薬学の発展における学問的基礎としても高い価値を持っております。

福山先生は、アメリカ化学会 Arthur C. Cope Scholar Award (平成5年)、有機合成化学協会賞(学術的)(平成14年)、国際複素環化学会 Senior Award in Heterocyclic Chemistry (平成15年)、アメリカ化学会 Award for Creative Work in Synthetic Organic Chemistry (平成16年)、日本薬学会賞(平成18年)、中日文化賞(平成21年)等の受賞に続き、今回の紫綬褒章の受章となりました。

福山先生は現在、有機合成化学協会会長、日本薬学会ファルマシア編集委員長として、有機合成化学と中心とした基礎研究の振興にもご尽力されております。

今後の先生のご健勝とますますのご活躍を祈念してやみません。

(大学院薬学系研究科・薬学部 横島聡)

米澤 明憲 大学院情報理工学系研究科教授/大学院理 学系研究科・理学部教授/情報基盤センター長

理学部情報科学科、情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻、情報基盤センター長の米澤明憲教授が、情報科学分野における長年にわたるソフトウェアシステムの基礎理論の研究と実践の功績が認められ、紫綬褒章を受章されました。



先生の受章における世界的功績として、「並列オブジェクト」に基づく計算モデルとプログラミング言語の提唱があります。

現在使われているWEBなどのコンピュータシステムのソフトウェアの大部分は、「オブジェクト指向」と呼ばれる設計・開発手法が用いられています。

これは、ある形式に従った「オブジェクト」と呼ばれるソフトウェア部品(モジュール)を多数組み合わせ、ソフトウェアシステムを見通し良くかつ安全に構築する方式です。

本方式の原型は、1960年代末の研究に遡ることが出来ます。1970年代半ば、まだ、「オブジェクト指向」という概念が定着する以前に、米澤先生は、「オブジェクト」の概念を一般化し、沢山の「オブジェクト」のひとつひとつに、小さなコンピュータを1個ずつ埋め込んだ「並列オブジェクト」という概念を提唱されました。そして、(1)「並列オブジェクト」に基づくプログラミング言語、(2)「並列オブジェクト」の高次・動的拡張方式、(3)「並列オブジェクト」の数学的モデル、(4)「並列オブジェクト」に基づいて構築されたソフトウェアシステムの超

並列コンピュータでの高効率な実行方式、などを次々に研究開発し、国際的に大変顕著な学術的かつ実用的な業績を上げられました。

このような功績の結果、1999年に世界最大のコンピュータ学会であるACM(Association for Computing Machinery)から、「並列オブジェクトシステム」のパイオニアとして、ACM Fellowの称号を授与されています。また、2008年には、国際オブジェクト技術協会(AITO)から、オブジェクト指向技術において卓越した功績を残した者に与えられる、Dahl-Nygaard賞も受賞されています。

現在では、並列オブジェクト指向技術は、インターネットにおけるセカンドライフやTwitterシステム、また、スーパーコンピュータを用いた科学技術計算分野では、生物物理学用分子動力学シミュレータの実現などにも使われています。

今回の受章は、長年に渡る先生の並列オブジェクト指向技術に対する理論から実践に至る優れた業績と科学技術に対する多大な貢献が高く評価されたものです。ご受章心よりお祝い申し上げますとともに、ますますのご活躍を祈念します。

(大学院理学系研究科・理学部 石川裕)

荒川 泰彦 生産技術研究所教授

荒川泰彦先生(生産技術研究所・教授)が電子工学分野における顕著なご功績により、2009年秋の褒章で紫綬褒章をご受章になりました。



荒川先生は、昭和57年に世界に先駆けて電子を3次元的に閉じ込める量子ドット概念を示され、半導体レーザに応用することで、閾値電流や温度依存性などの特性を劇的に改善できる可能性を指摘されました。この論文の重要性・インパクトは2000回を超える被引用回数が示しています。その後、ご自身自らその実現を目指した研究に取り組み、平成16年にはご自身の予測を実際のデバイスとして実証されました。これは量子ドットデバイスの実用化に向けた第一歩として、世界に大きな衝撃を与えました。これらの成果は量子ドットレーザの実用化を目指したベンチャー企業設立につながるなど、産業界にも多大な貢献をされていらっしゃいます。さらに、量子ドットを用いて初めて光通信波長帯単一光子発生器を実現するなど、量子情報デバイスの分野でも顕著な業績を挙げておられます。また、平成4年には半導体微小共振器において共振器励起子ポラリトン効果を世界で初めて観測されました。この発見に端を発して、いまや世界中で多くの研究者が関連研究に取り組んでいます。近年では世界最高のQ値をもつ3次元フォトニック結晶共振器を用いた究極的な量子ドット

- 光相互作用の実現にも成功されていっしょういします。このように、先生は量子ドット光デバイスを中心とした光電子工学研究を世界的に牽引して来られました。

また、数々の国家プロジェクトのリーダーとして、強力なリーダーシップと産学連携のもとで量子ドットレーザーに代表される基礎物理に立脚した新デバイスの実現に向けた研究を推進させており、現在も本学量子情報エレクトロニクス研究機構の機構長として、研究開発に加えて、産学連携の推進、若手研究者の育成にもご尽力されていっしょういします。さらに様々な政府関係委員や学会の要職も歴任され、ナノ光電子工学に限らず関連学系の発展にも多大な貢献をされていっしょういします。

先生とご一緒に研究をさせていただけることは、我々後輩にとってまことに幸せなことであります。改めてご受章を心よりお祝い申し上げますとともに、今後の先生のご健勝とますますのご活躍を祈念いたします。

(生産技術研究所 岩本敏)

文化功労者顕彰

塩野宏名誉教授、谷口維紹教授、古在由秀名誉教授、山崎敏光名誉教授が文化功労者として顕彰されました。

塩野 宏 名誉教授 (大学院法学政治学研究科・法学部)

本学名誉教授塩野宏先生は、1956年3月に本学法学部を卒業され、以後、助手・助教授を経て1973年に教授となり1992年に定年退職されるまで、本学法学部および大学院法学政治学研究科において行政法の研究と教育に当たられました。また、その間、学内行政に関しても、法学部長・総長特別補佐その他さまざまな職責を担われました。東京大学を御退職後は、成蹊大学法学部教授・東亜大学通信制大学院教授を歴任しておられます。

塩野先生は、行政法総論、行政手続・行政争訟法、行政組織法、地方自治制度、公務員法、公物法、給付行政法、放送・電気通信法等々の広汎な領域にわたって、多くの研究業績を挙げてこられました。助手論文であった『オットー・マイヤー行政法の構造』や、「公法と私法」の問題に関する一連の著作などに示されているとおり、先生の行政法研究は、実定法上の制度や議論をそれ自体として鋭利に分析するとともに、深い洞察力をもってそれを歴史的な生成・発展・変容のパースペクティブのなかにも適切に位置付けることにおいて、他の追随を許さないものです。また、特に行政法総論の研究において、先生が、固定的な枠組みのなかで解答の体系へと向かう従来の行政法のあり方の反省にもとづき、いわゆる行政



過程論、すなわち、行政の複雑かつ動的な過程の全体を視野に収めたうえでそれに対する適切な法的検討の構築に努めるという立場で、広くかつ一貫した考察を展開されたことは、以後の行政法のあり方に根底的な方向付けを与えています。

先生は、日本公法学会の運営に長く携わり、その理事長を2期にわたって務められたのをはじめ、学界の各種の活動に主導的な役割を演じられ、また、ドイツをはじめ諸外国の研究者との学問的交流にも熱心に取り組んで来られました。その他、国や地方自治体の行政関係諸制度の整備・運用に関しても、現在まで、多くの重責を担っておられます。

塩野先生は、さきに、その学問業績により紫綬褒章を授与され、また日本学士院会員に選定されました。さらにこのたび、文化功労者の栄誉が与えられたことは、まことに慶賀の至りです。これからも、お元気で、御自身の研究と後進の指導の両面においてますますお力を発揮して下さるようお祈りいたします。

(大学院法学政治学研究科・法学部 小早川光郎)

谷口 維紹 大学院医学系研究科・医学部教授

本学の谷口維紹教授（大学院医学系研究科・医学部）が本年度文化功労者に顕彰されました。ジェンナーによる種痘の確立からはじまる免疫学という学問は十八世紀の昔より今に至るまで連綿と続いておりますが、谷口先生はこの歴史ある学問に分子生物学的手法を用いて新たな風を吹き込まれました。すなわち、免疫をはじめとする生体防御系において細胞間情報伝達を担う生理活性物質サイトカインを分子レベルで捉える手法を世界に先駆けて確立され、ヒトβ型インターフェロン(IFN-β)の全構造を世界で初めて解明するとともに、組み換え型インターフェロン産生法の基礎を確立されました。また、インターロイキン2(IL-2)の遺伝子単離に成功し、初めて単一因子としてのIL-2がTリンパ球の増殖作用を有することを実証なさるなど分子免疫学の発展に多大な貢献を果たされました。現在、IFN-βならびにIL-2はウイルス疾患や癌などの治療に用いられ、サイトカイン臨床応用における先生の先駆的な業績は医学的にも高く評価されています。

その後もIRFと呼ばれる転写因子ファミリーの発見とその機能の解析により免疫と発がんを繋ぐ研究を展開され、また最近では、外来病原体の侵入をいち早く感知排除する自然免疫応答と呼ばれる即応性の免疫システムについても、病原体由来DNAを特異的に認識する新規受容体の同定や、汎く核酸を認識するセンサー因子の発見など次々とインパクトの高い成果を発表なさるなど、日々、免疫学の「最先端」を目指し、研究に邁進さ

れておられます。近年、サイトカイン研究は、生命体の発生や組織構築、さらに生体防御系などさまざまな生命維持機構を理解する上で極めて重要な研究領域へと発展しており、これらサイトカイン研究の基盤を築き、免疫学、がん研究を中心として長年にわたり先駆的な研究を展開なさってこられた先生の業績は国際的に高く評価され、既に多くの権威ある国際賞等を受賞なさっておられます。さらに、平成15年には米国科学アカデミー外国人会員に選出され、現在も国際的な学会活動を精力的に展開されています。この度の顕彰を心よりお祝いし、今後とも先生の研究が免疫学、医学そして人類の未来に大きく貢献してゆかれることを、期待してやみません。

(大学院医学系研究科・医学部)

古在 由秀 名誉教授 (東京天文台)

古在先生は1951年に東京大学理学部天文学科を卒業、1952年に東京天文台助手になられ、土星の衛星系の運動を研究し、1958年「土星の衛星系の定数」により理学博士の学位を取得されました。ついで地球の衛星である人工衛星の運動を研究され、この分野で先駆的業績を多くあげられました。先生は理論的研究ばかりでなく観測的研究にも手をつけられ、自ら構築した運動理論と人工衛星の精密観測を比較することによって、地球の形が西洋梨型をしていることを発見されました。



さらに先生は小惑星の研究にも手をのびし、ある条件のもとで軌道傾斜角と軌道離心率が大きく変化しうることを発見され理論的にも解明されました。この現象は現在「古在機構」(古在共鳴、古在効果とも呼ばれています)と呼ばれ、小惑星ばかりでなく太陽系外縁天体、衛星系、太陽系以外の惑星系の力学的研究をするときに頻りに古在機構として利用されています。古在先生の小惑星に関する研究業績をたたえるために、小惑星3040番(古在機構に捕獲されている)が「KOZAI」と命名されました。

古在先生は天体力学を精力的にすすめるかたわら、1981年から1988年まで東京天文台長、1988年から1994年まで国立天文台長として天文学の振興に力をつくされました。その最大の成果が、単一鏡として世界最大の口径8.3mの反射望遠鏡(愛称すばる)をハワイのマウナケア山頂(標高4139m)に設置したことです。また1988年から3年間は、全世界の天文学者の学術組織である国際天文学連合の会長をも務められました。

古在先生の学術的業績にたいして1963年に「朝日賞」、1979年に「恩賜賞・日本学士院賞」、1989年にアメリカ天文学会より「Brouwer賞」、2002年に勲二等瑞宝章が授与されています。また、1970年には「英国王立天文学会客員会員」、1980年には学士院会員に列せられまし

た。1997年には県立ぐんま天文台長に就任し、現在も宇宙科学の普及・啓蒙に尽力なされています。これからの先生のご健勝とさらなるご活躍を祈念いたします。

(国立天文台名誉教授 木下宙)

【写真提供：県立ぐんま天文台】

山崎 敏光 名誉教授 (原子核研究所)

山崎敏光名誉教授が本年度文化功労者に選ばれました。

山崎先生は1957年に本学理学部物理学科を卒業なされ、本学原子核研究所助手、カリフォルニア大学およびニールス・ボーア研究所研究員、本学理学部講師、助教授、教授を経て、1986年より本学



原子核研究所所長を務められました。退官後は日本学術振興会監事等を歴任され、現在は財団法人仁科記念財団理事長及び日本学士院会員として活躍されるとともに、自ら科研費を獲得され、研究に励んでおられます。

山崎先生は中間子などの粒子ビームを原子核物理のみならず原子分子・物性科学に至る広い分野の研究に応用して新しい学問分野を拓かれました。

特に原子核の磁気能率の高精度測定による核内での π 中間子交換流の発見、ミューオンスピン回転緩和共鳴法の開拓、反粒子を含む原子分子の研究、 π 中間子原子を用いた核子の質量獲得メカニズムの研究などは、きわめて独創的なものです。

山崎先生はこれらの研究の多くをカナダ、ドイツ、スイスなどの加速器施設で行い、学術の国際交流に貢献されました。一方、国内においては、1970年代後半に高エネルギー物理学研究所内に世界初のパルス状ミューオンビーム施設を建設し、また、東京大学原子核研究所所長として大強度陽子加速器施設(現在のJ-PARC)実現の礎を築くなど、わが国の原子核物理学研究に主導的役割を果たされました。

山崎先生は松永賞、仁科記念賞、藤原賞、日本学士院賞恩賜賞を受賞しておられますが、このたび文化功労者に列せられたことは、先生の業績を顕彰するのに相応しいものとして、心からお喜び申し上げます。

(大学院理学系研究科・理学部 早野龍五)

一般ニュース

高齢社会総合研究機構

東大、ソウル大、APRU 共催で、高齢社会に関する国際会議を開催

一般

10月19日（月）から23日（金）の5日間、韓国ソウル国立大学にて、ソウル国立大学、東京大学、APRU（環太平洋大学協会）の共催による国際会議が開催された。会議のテーマは「高齢化するアジアの課題と可能性」。この会議は、昨年9月に東京大学で開催された堀場・APRU国際会議「Strategies for Aging in Place」の第2回にあたるもので、アジア、環太平洋地域を中心とした17の国と地域から、公募で選ばれた若手のジェロントロジー（老年学）研究者が参加した。5日間に渡ってシンポジウム、研究発表、高齢者施設等視察、グループディスカッションを行い、最終日には国際研究プロジェクト案の発表会が開催された。

東京大学からも、医学、保健学、建築学、教育学、心理学領域から6名の若手研究者が参加し、研究発表やディスカッションに参加した。



グループディスカッションで熱心に討議する参加者

日本、韓国を筆頭に、アジア諸国は今後30年で急激に人口の少子高齢化が進み、世界一の人口高齢圏になることが予測されている。経済発展と高齢化対策を両立させ、いかに人々が長寿を喜べる社会をつくるか、次世代の研究者がそれぞれの国の事情や課題を持ち寄り、熱い議論と提案が行われた。いくつもの共同研究案が提案され、ハードスケジュールの5日間を乗り切った最終日には、参加者同士の間には強い絆が生まれた。



会議の合間には韓国料理を楽しむ時間も



参加者間には今後続く強い絆が生まれた

会議の継続開催を望む声が大いことから、来年はシンガポールでの開催を目指して現在交渉中である。開催決定の際には東京大学でも公募通知が出る予定なので、関心のある方は奮って応募いただきたい。

本部キャリアサポートグループ

知の創造的摩擦プロジェクト第9回交流会開催

一般

10月31日（土）、駒場Iキャンパスコミュニケーション・プラザ南館において、知の創造的摩擦プロジェクト第9回交流会「夢中になれるものはありますか？」が開催された。

卒業生との交流を通して、学生のキャリア形成支援を目指すこの大学主催のイベントも、2005年10月の本郷キャンパスでの第1回以来、毎年、本郷キャンパス、駒場Iキャンパスでの開催を経て第9回目となった。今回は、約120名の卒業生と約280名の学生が参加した。

開会にあたり小島憲道理事（副学長）（学生担当および卒業生室担当）から、「多方面で活躍されている卒業生が集まるこの場が、学生諸君にとって、人や知恵、発想との新しい出会いのきっかけになり、世代の違い、専門分野の違いを超えて交流することは、縦方向にも横方向にも知的摩擦を感じながら、知性、感性を磨くためのまたとない機会となることを期待する」と励まされた。

会は、第一部では中規模及び小規模のグループディス

カッション、第二部では懇談会、という二部構成で13時から19時まで、和やかな中にも熱のこもった会話が繰り広げられた。

交流会は、卒業生有志の集い「東京大学三四郎会」と本学学生サークル「東大ドリームネット」の協力・支援のもとに行われるものである。回を重ね、学生と卒業生がともに主体的に参画する「東大コミュニティ」ともいえるべき、交流の仕組みの熟成への道が開かれ、更に発展することが期待される。



開会の挨拶をする小島理事（副学長）



交流の輪

環境安全本部

防災訓練（本部棟・第二本部棟）実施される

一般

11月2日(月)、平成21年度東京大学防災訓練(本部棟・第二本部棟)を実施した。今回は、昨年度の内容(避難訓練)に加えて、「災害対策本部」の設置訓練を行った。濱田純一総長、佐藤慎一理事(副学長)、松本洋一郎理事(副学長)、小島憲道理事(副学長)、田中明彦理事(副学長)、江川雅子理事、山田一郎副学長(環境安全本部長)ほか、多くの教職員が参加し、「災害対策本部」としての意思決定を行った。

今回の訓練は、震度6強の地震(本郷地区)を想定していた。本部棟・第二本部棟の教職員は、懐徳館付近(セイフティー・エリア)まで避難し、点呼・確認、濱田総長による「災害対策本部」の設置宣言の後、担当教職員

は災害対策本部設置訓練に、そのほかの教職員は各種体験訓練(ハシゴ車体験訓練、煙体験ハウス訓練、起震車訓練、消火訓練)に参加した。



災害対策本部会議(ロールプレイング)の様子

また、環境安全本部では、昨年度に引き続き今年度においても、6月14日(日)実施の「本郷消防団ポンプ操法大会」、10月4日(日)実施の「文京区内消防団合同防災訓練」、10月17日(土)実施の「平成21年度震災消防訓練」及び10月29日(木)実施の「消防行政の動向を踏まえた講習会」など、さまざまな防災活動に参加してきた。これらの活動に対して、11月12日(木)、東京消防庁予防部長より感謝状が贈呈された。環境安全本部における防災対策の取り組みは、11月17日(火)発行の「東京大学新聞」(「どうする? グラッときたら地震対策は万全ですか」の「学内の対応は」欄)でも、田中淳部長(環境安全本部防火防災部、大学院情報学環教授)、小山富士雄部長(環境安全本部企画調整部)への取材を通して一部紹介された。



平成21年度震災消防訓練



東京消防庁予防部長より感謝状



相澤議員のご講演の様子

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

第4回国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」フォーラム開催



11月4日(水)13時から17時に、医学部鉄門記念講堂にて、第4回国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」フォーラムが開催された。参加者は約230人であった。

「気候変動適応型社会の実現に国家基幹技術がどのように貢献できるか?」をテーマに、各分野で気候変動適応に取り組む諸機関との意見交換を通じて国家基幹技術に対するニーズの把握を行うとともに、関係機関や研究分野間の更なる連携を図ることなどを主な目的として、文部科学省、宇宙航空研究開発機構、海洋研究開発機構および東京大学が主催し、科学ジャーナリストの瀧澤美奈子氏の司会で、このたびの第4回フォーラムが実施された。

フォーラムの冒頭では、内閣府総合科学技術会議有識者議員の相澤益男氏より、「気候変動適応型社会の実現に向けて」と題して、総合科学技術会議での取り組みが紹介された。総合科学技術会議において、「気候変動適応型社会の実現に向けた技術開発の方向性立案のためのタスクフォース」が設置され、その議論の中で気候変動適応型社会では、緩和策と適用策の両輪で対策を進めなくてはならないことが示され、このためには、国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」がぜひとも重要であり、特に期待をしていることが語られた。

次に、「地球環境を診断する基盤技術」と題して文部科学省大臣官房審議官・海洋地球観測探査システム推進本部長である森本浩一氏による、国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」の紹介があった。その後、研究開発実施主体から、宇宙航空研究開発機構地球観測研究センター長の福田徹氏による「衛星観測監視技術」、海洋研究開発機構理事の平朝彦氏による「次世代海洋探査技術等」、本学地球観測データ統融合連携研究機構長の小池俊雄教授による「データ統合・解析システム」の研究進捗状況の報告が行われた。



システムの全体像をお話する森本審議官

引き続き、「今、私たちが直面している課題」と題して、国土技術政策総合研究所 河川研究部流域管理研究官の藤田光一氏、国立感染症研究所 昆虫医科学部部長の小林陸生氏、農業環境技術研究所 大気環境研究領域上席研究員の横沢正幸氏、国際協力機構地球環境部部長の中川聞夫氏から、各機関における取り組みの紹介とともに、「海洋地球観測探査システム」への要望や期待が述べられた。

フォーラムの後半では本学生産技術研究所の沖大幹教授がモデレーターとなり、パネリストとして当日の講演者8名のほかに内閣府政策統括官付参事官の廣木謙三氏にもご参加いただき、計9名で、「気候変動に強い社会を目指して」と題したパネルディスカッションが行われ

た。会場からは「データ統合・解析システム」に関する質問が集中し、またパネリスト間でも熱心な意見交換が行われ、大成功のうちに第4回フォーラムが終了した。



パネルディスカッションの様子

地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA) 事務局
<http://www.diasjp.org/>
 TEL : 03-5841-6132

本部学生支援グループ



学生企画「本郷キャンパス食環境改善プロジェクト」14000人のメニューコンテスト試食会・授賞式開催さる

平成20年度学生企画コンテストで優秀賞を収め、本年実施されている「本郷キャンパス食環境改善プロジェクト」(大久保智夫代表・経済学部4年)において、学生のアイデアを生協食堂のメニューに反映させるべく募集した「14000人のメニューコンテスト」の試食会・授賞式が11月6日(金)第二食堂にて開催された。200通近くの応募があり、最終選考にノミネートされた5作品の中から、学生審査員50名の試食と投票を経て、西村鷹則さん(農学生命科学研究科修士課程2年)の「脱いか東丼」が最優秀賞に選ばれ、表彰状と副賞の図書カード5万円分が贈呈された。牛肉といり卵を酢飯の上に乗せたメニューで、がっつり食べて「いか東」(いかにも東大生を感じさせて恰好悪い)から脱却する、というイメージから生まれた作品だ。また、優秀賞は中村聡子さん(公共政策大学院修士課程1年)「三四郎つけ麺」、正木あす佳さん(工学系研究科修士課程1年)「東大生のごはん」、有賀雄大さん(文科三類2年)「点数とり照り丼」、大塚真史さん(文科一類2年)「牛トマ(UT)丼」が受賞した。受賞作品は各生協食堂において順次メニュー化される。

本プロジェクトはその他の企画も進行中である。第二食堂の改善提案を行い、リニューアル時に反映させた。とりわけハラールメニューは、イスラム圏の留学生と何回となく懇談を重ねることでメニュー数が大幅に拡大さ

れ、好評を博している。これは首都圏の各大学の食堂メニューとしても提供される予定である。中央食堂と銀杏メトロ食堂においては携帯電話のアンテナ設置を行い、順を追って各キャリアとも使用可能となる。就職活動のために、企業からの連絡を待つ学生にとって、食堂が利用しやすくなった。

また、最後の活動として、第二食堂が閉店後も様々な所属の学生が集まり、コミュニケーションできる場としても活用されるよう提案していく。



大久保代表から表彰される西村鷹則さん



最優秀賞：脱いか東丼

本部留学生支援グループ



株式会社アサツー ディ・ケイ会長と東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生、本学関係者の懇談会を開催

11月6日(金)、株式会社アサツー ディ・ケイ本社において、「株式会社アサツー ディ・ケイ (ADK) 会長と東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生、本学関係者の懇談会」が開催された。

この懇談会は、第1期生(2006年10月入学)の修了以来、本学を会場に行われてきたが、今回は、寄附者であるADK稲垣正夫会長のご厚意によりADK本社で開催されたものである。

懇談会には、稲垣会長及びADK関係者、本ADK中国育英基金奨学生、小島憲道理事(副学長)等本学関係者が出席した。稲垣会長から奨学生の丁月曦さん(大学院理学系研究科修士課程修了生)に対しては、今後の活躍に大いに期待する旨の激励の言葉が贈られ、続いて記

念品の授与が行われた。奨学生からは、今までのADKからの多大なご支援に対してお礼の言葉があった。

その後、ランチをとりながらの歓談に移り、終始和やかな雰囲気の中、閉会となった。



懇談会の後、一同揃っての記念撮影

海洋アライアンス

第7回イブニングセミナー「大陸棚限界委員会の科学と政治学」を開催

一般

11月12日（木）、本郷キャンパス工学部3号館において、第7回イブニングセミナーが開催された。今回は大陸棚限界委員会の現委員でもある玉木賢策教授（大学院工学系研究科・工学部）を講師としてお招きし、「大陸棚限界委員会の科学と政治学」をご講演いただいた。

大陸棚は一般的に陸から続く比較的穏やかな傾斜を持つ海底を指すが、国連海洋法条約では沿岸国の主権的権利の及ぶ海底を意味している。大陸棚の範囲は基本的には沿岸国の基線から200海里までとされるが、一定の条件を満たせば、最大350海里まで延長させることが可能である。そのため現在、該当する海域を持つ沿岸国は申請に余念がない。それらの審査を行っているのが、大陸棚限界委員会である。玉木教授は、本講演において大陸棚限界委員会の現状や大陸棚を定義している国連海洋法条約第76条について発表した。



講演の様子

大陸棚限界委員会は5つの地域を代表した、21カ国の委員で構成されている。それぞれの地域に割り当てられた人数が選出されるのだが、海底資源開発に意欲的な国が多いことなど政治的側面のあることが指摘された。また委員会では委員の専門分野の違いにより、議論が噛み合わないことがあるなど、実際に委員会に携わっている玉木教授だからこそ語れる苦労話もあった。大陸棚の拡大は世界的趨勢であるが、それを一定の秩序のもとで審査していく委員の責任は重大である。玉木教授の今後の活動を敬意を持って見守りたいところである。

今回のイブニングセミナーは学内外より、教員・学生問わず多くの参加者があった。分野を越えて様々な質問や意見が飛び交い、国際舞台で奮闘する玉木教授の講演に興味津津といった様子であった。

次回のイブニングセミナーは1月に開催予定です。詳細は海洋アライアンスホームページをご覧ください。多くのご参加をお待ちしています。

海洋アライアンスホームページ：

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

海洋アライアンス

平塚沖総合実験タワー開所記念講演会開催

一般

11月16日（月）、海洋アライアンスは平塚市商工会議所にて平塚沖総合実験タワー開所記念講演会を開催した。平塚沖総合実験タワーは、2009年7月に（独）防災科学技術研究所より東京大学に譲渡され、研究活動やアウトリーチ活動に利用されている。本講演はタワーの新たな出発を記念し、学内外に広く知ってもらうことを目的として行われた。

講演会は海洋アライアンス 浦環機構長の挨拶で幕を開け、大藏律子平塚市長より祝辞をいただいた。大藏市長は「平塚市のタワーが今後の海洋発展のきっかけになれば」と話し、タワーへの期待を表した。



大藏律子平塚市長の祝辞

続いて河野太郎衆議院議員、今井雄三平塚土木事務所長の講演があった。河野議員はビデオ講演という形ではあったが、「子供のころから見ていたタワーが最先端研究の拠点になると思うとうれしい」「平塚の子供たちに夢を与える」と喜びを語った。また今井所長は「タワーのデータはレジャーだけでなく沿岸防災にも役立つ」とタワーの重要性を訴えた。

さらに田島芳満准教授(大学院工学系研究科・工学部)、林昌奎教授(生産技術研究所)、赤坂甲治教授(大学院理学系研究科・理学部)による以下の講演が続いた。

- ・「平塚タワー観測データに基づく西湘海岸における被災メカニズムの検証」 田島芳満准教授
- ・「波浪計測の最前線」 林昌奎教授
- ・「多様な相模湾の生物の活用に向けて」 赤坂甲治教授

まず田島准教授は西湘・湘南海岸における長期的・不可逆的環境変化に着目し「平塚沖総合実験タワーはこのような変化を随時モニタリングしてその現象を解明し、沿岸域の順応的な管理を行う上で必要不可欠」とタワーの重要性を訴えた。

続く林教授は開発中の波浪観測レーダについて「沿岸域の波浪予報に有効」と述べ、相模湾の海洋波浪観測及び予報システムや衛星、航空機、船舶からの海面観測を統合した地球規模の海面観測システムの開発を進めていることを明らかにした。

さらに赤坂教授は世界的にも極めて豊富な相模湾の生物相を美しい写真で紹介し、「多様な海洋生物もヒトと共通の機構で生命活動を営んでおり、それらを研究することが私の生活にとって重要な発見につながる」と述べ、近年の生命科学の発展に海洋生物が大いに貢献している点に言及した。

今回の講演会には予想をはるかに上回る 120 名以上の参加者が集まり、大盛況のうちに幕を閉じた。参加者の中には平塚市外から駆けつけた人もおり、平塚沖総合実験タワーへの関心の高さがうかがわれた。

海洋アライアンスホームページ：
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

本部奨学厚生グループ

「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成 21 年度 10 月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催

「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成 21 年度研究奨励費受給者証書授与式」が、11 月 16 日(月) 14 時 30 分から、関係役員等の臨席の下に御殿下記念館研修室で開催された。

外国人留学生特別奨学制度は、「大学院における特に優秀な私費外国人留学生に対し研究奨励費を支給することにより、本学での学術研究への取組を支援するとともに、

諸外国からの優秀な留学生の受入促進に資すること」を目的として、平成 16 年度から実施されているものである。

本年度 10 月期は、修士課程大学院学生 4 名、博士課程大学院学生 8 名の合計 12 名(月額 15 万円、支給予定期間：平成 21 年 10 月から標準修業年限の最終月まで)が受給者として決定され、当日は小島憲道理事(副学長)から受給者に受給者証書が手渡された。

次いで、小島理事(副学長)から「受給者の皆さんは、本制度による研究奨励費が支給されることを誇りに思い、学業や研究に専念してください。教職員は大いに期待しています。」という旨の挨拶があった。引き続き、受給者を代表して、東京大学外国人留学生特別奨学制度採用者大学院工学系研究科の金慧卿さんから、感謝のスピーチがあった。



東京大学外国人留学生特別奨学制度受給者代表者スピーチ



平成 21 年度研究奨励費受給者と関係者

<問い合わせ先>

本部奨学厚生グループ奨学チーム
内線 22548

本部人材育成グループ

東京大学教職員永年勤続者表彰式行われる



一般

平成 21 年度の東京大学教職員永年勤続者表彰式が、11 月 18 日（水）9 時 45 分から、本部棟 12 階大会議室において、濱田純一総長、佐藤慎一理事（副学長）、久保公人理事、関係部局長及び関係事務（部）長等の列席のもと行われた。

表彰式では、被表彰者 83 名を代表して、附属図書館情報サービス課長 鈴木秀樹さんに表彰状の授与並びに記念品が贈呈された。総長から挨拶の後、被表彰者を代表して、史料編纂所史料保存技術室技術専門職員 村岡ゆかりさんより謝辞が述べられた。



濱田総長から表彰状と記念品を受ける鈴木秀樹さん



濱田総長に謝辞を述べる村岡ゆかりさん

なお、本年度表彰された方々は次のとおりである。

教育・学生支援系	猪 又 裕 一
研究推進系	古 川 義 孝
総務・法務系	玉 田 邦 彦
人事・労務系	小 枝 政 稚
施設・資産系	高 山 勇 二
	小 川 友 明
附属図書館	鈴 木 秀 樹
	綾 部 輝 幸

アイソトープ総合センター
情報基盤センター

大学院法学政治学研究科・法学部
医学部附属病院

埜 和 之
上 杉 将 史
下 田 哲 郎
萩 谷 静 香
内 間 邦 夫
依 田 正 明
水 澤 和 靖
相 澤 か ず 子
谷 口 幸 一
大 塚 健 司
林 利 廣
更 科 岳 郎
鈴 木 由 美 恵
田 中 雅 美
小 室 貴 子
早 川 雅 之 仁
久 保 英 子
大 友 弥 寿 美
山 口 裕 子
岡 山 智 加 子
佐 藤 光 子
宮 澤 千 恵 子
風 間 麻 紀 子
梅 沢 真 貴 子
六 戸 八 重 子
田 谷 千 春
堀 昌 代

大学院工学系研究科・工学部

目 良 裕
五十嵐 佳 子
小 林 や よ い
松 永 大 一 郎
林 修 一
中 村 知 代 子
石 川 具 子
小 林 茂

大学院人文社会系研究科・文学部
大学院理学系研究科・理学部

萩 原 成 騎
半 田 利 弘
今 西 聖 奈 子
箱 崎 実
北 見 佳 子
管 波 明 子

大学院農学生命科学研究科・農学部

加 賀 谷 隆
平 山 和 宏
橋 本 健 一
福 井 浩 学
平 松 圭 二
平 野 和 宏
横 山 美 佐 代

大学院経済学研究科・経済学部

日 森 伸 子
鈴 木 友 紀

大学院総合文化研究科・教養学部

籾 口 友 紀

大学院数理科学研究科
大学院教育学研究科・教育学部

大学院薬学系研究科・薬学部
医科学研究所

地震研究所
東洋文化研究所
生産技術研究所

史料編纂所
分子細胞生物学研究所

海洋研究所

宇宙線研究所
物性研究所
柏地区事務部

矢崎力太
上田春江
麻生和彦
沖濱真治
三浦邦彦
萩原稔
鈴木博
小坂規
大橋正浩
中村透
野崎勝利
丸山忍
井上麻子
村岡ゆかり
磯山勉
西永岩文
戸田浩子
猿渡敏郎
永野太
石塚秀喜
原沢あゆみ
二ツ神和博
濱田真実子
以上 83 名

本部入試グループ

**平成 22 年度大学入試センター試験の
本学割当数決まる**

平成 22 年度大学入試センター試験の東京地区での割当数が 77,052 人に決まり、このうち本学が分担する志願者数は 10,365 人に確定した。

なお、平成 22 年度は、本郷試験場及び教養学部試験場の他、都立高等学校 2 校・私立高等学校 3 校の計 5 校を借用して実施することになった。

各試験場ごとの割当数及び担当学部は、次のとおりである。

試験場名		志願者数	担当学部	
1	東京大学 本郷試験場	法学部	985	法学部
		経済学部	495	経済学部
		工学部	1,040	工学部
		その他	3	薬学部
		小計	2,523	
2	東京大学教養学部試験場	2,917	教養学部	
3	都立白鷗高等学校試験場	760	教育学部	
4	私立富士見丘高等学校試験場	1,085	医学部	
5	私立海城高等学校試験場	1,125	文学部	
6	都立日比谷高等学校試験場	920	理学部	
7	私立開成高等学校試験場	1,035	農学部	
合計		10,365		

本部入試グループ

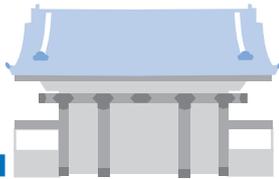
入試事務室の設置

平成 22 年度入学者選抜実施に関する事務を処理するため、1 月 1 日（金）から 3 月 31 日（水）までの間、入試実施委員会のもとに、入試事務室が設置されることとなった。

入試事務室は、教育・学生支援系入試グループ長を室長に、室長代理、室長補佐及び室員若干名をもって構成される。

室員は、入試グループ職員のほか、本部各系等から派遣される事務職員で、およそ 3 か月にわたり、入学試験に関する業務にあたる。

部局 ニュース



物性研究所

第3回東京大学堀場国際会議を開催

部局

10月12日(月・祝)から10月16日(金)まで、千葉県長生郡の「生命の森リゾート」で、第3回東京大学堀場国際会議「Horiba-ISSP International Symposium on "Hydrogen and water in condensed matter physics"」が開催された。東京大学堀場国際会議の趣旨をふまえて、参加者は上記会場に開催期間をとおして泊まり込みで、発表と議論を行った。国内外から22件の招待講演、19件の口頭発表(依頼講演+一般講演)および49件のポスター発表があった。参加者数は103名であった。

会議では、地球および宇宙にユビキタスに存在し、最近、エネルギーや環境問題から注目を集めている水素と水について、物性物理の視点から議論を行った。具体的には、水の凝集相、宇宙や生体での水、物質中(生体から固体まで)のプロトントランスファー、ソフトマターと水、材料中の水素、水素結合と水の電子状態、高圧下の水、表面における水素と水、電気化学反応、制限空間における水、水素の量子効果などについて発表があった。

従来の学会や専門分野の垣根を取り払い「水素と水の物性科学」という観点から、様々な分野から第一人者の講演を聞くことができた。また、若手研究者から非常に質の高いポスター発表が多数あり、ポスターセッションの時間が足りないくらい熱い議論が続いた。さらに、泊まり込みでのシンポジウムという形式をとったので、散歩や食事などのインフォーマルな場でも活発な議論をすることができた。

会議後、海外招聘者から届いたメールのなかには、「It was a wonderful meeting, perfectly organized, and with an outstanding scientific program - I learned a lot!」というありがたいメッセージもあった。もちろん、会議が成功裏に運営できた一番の要因は、「東京大学堀場国際会議」からのサポートである。物性研究所からは、学外実行委員を嘱託研究員としてサポートしていただき、ポスターボード、液晶プロジェクターなどシンポジウム運営に必要な資材も利用させていただいた。また、物性研究所国際交流室、実行委員の研究室に所属する大学院生や秘書さんには、会議の運営をお手伝いいただいた。実行委員一同この場を借りて改めて感謝したい。

なお、会議のスコップやプログラムについては、下記

のWebサイトから情報を得ることができる。

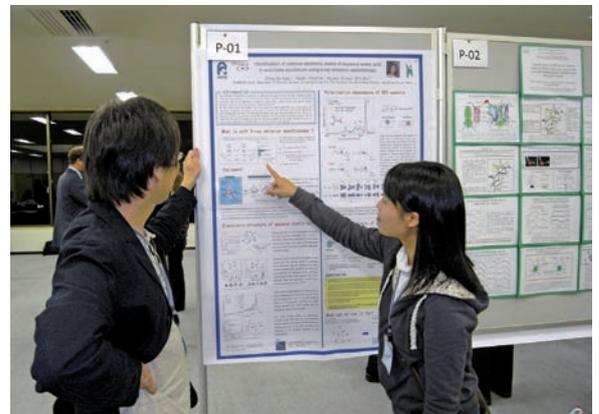
<http://www.issp.u-tokyo.ac.jp/public/issp-11/index.php>



参加者集合写真(生命の森リゾート「森のホール」にて)



口頭発表風景(デンマーク工科大学ネルスコフ教授)



ポスター発表風景

大学院農学生命科学研究科・農学部

附属牧場で「牧場公開デー」開催される

今年で5回目になる牧場公開デーは、10月31日(土)に開催され、昨年に引き続き笠間市農政課職員のご協力を頂いた。

笠間市からは、地元産のサツマイモやジャガイモの焼き芋、コシヒカリ米のおにぎり、カブの漬物とそのスープの出店があった。さらに笠間市は全国でも有数な栗の産

地であるため、栗を茹でた試食コーナーや子ども向けのスナッグゴルフなどの出展もあった。



笠間市が出店したコーナーでにぎわう様子

牧場側では、落書き用にヘイレージ（牧草をラップでくるんだもの）を用意した他、仔ヤギとのふれあい広場、ミルクの試飲コーナー、ぬり絵大会、牧場クイズラリーを開催した。午後は市民講座「インフルエンザなどの感染症をもっと知ろう」や乗馬体験など多彩なイベントの企画に、多くの市民が訪れた。イベント中に山口伸樹笠間市長も来場され、牧場生産の生乳を味わいながら試飲されていた。

その他、ホイールローダ（写真下）を教員宿舎前に配置して、乗車体験をしたり記念撮影に収まる家族で好評を博した。



教員宿舎前に配置したホイールローダ

牧場では、農林水産技術会議事務局が公募した「新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業」の課題として「糞尿媒介感染症統御のための処理技術の実用化と先進的衛生管理法」が昨年度から3年間にわたり採択され、その一環で初年度にホイールローダを導入した。

ホイールローダは、大型特殊自動車に分類される建設機械であるが、その操舵は「中折れ式」で四輪駆動と安定感があり、当牧場に設置してある狭隘な発酵槽の中で緩急自在に動作し、堆肥原料の効果的な攪拌とともに、発酵槽の隅々まで望ましい発酵ができ、発酵菌の有効性

を証明する手段の強力な武器となっている。

家畜腸管感染症は、感染症による家畜の経済的損失、環境汚染及び食中毒病原微生物による食品の汚染を介した人の健康危害の三大問題を内包しており、これらの感染症の克服は畜産における本質的課題となっている。腸管感染症においては、糞口感染を阻止することが、これらの感染症の暴露・増幅の循環を絶つ最も有効な方法である。本研究で用いる好気性超高熱発酵菌（Aerobic Hyperthermic Ferment：AHF）は、有酸素状態で100℃以上の高温で発酵し、熱及び活性酸素を介して非常に高い殺菌効果を有すると考えられている。そのため、家畜の腸管感染症の防御及び家畜糞尿を介する環境汚染の防除に本菌を用いて、殺菌効果の機序の解明や有効性評価を行い、堆肥の生成など実用化を目指している。

その他、現在牧場で行っている内閣府食品安全委員会（食品健康影響評価技術研究「プリオン遺伝子ホモノックアウト牛の特性に関する研究」）や（社）畜産技術協会（民間活力を活用した畜産技術開発研究「幼牛期のエピジェネシス・刷り込みによる牛の体質改善に関する研究」）の委託事業とともに、健全な研究課題の実現に取り組む、教職員一丸となって牧場の発展に努めたい。

社会科学研究所



ソウル大学日本研究所主催のシンポジウム「日本における21世紀の高等教育像」に参加

社会科学研究所は、11月3日（火・祝）にソウル大学において、ソウル大学日本研究所が主催したシンポジウム「日本における21世紀の高等教育像」に参加し、韓榮恵（ハン・ヨンエ）日本研究所長の趣旨説明のあと、末廣昭社会研究所長が日本における国立大学法人化の背景と現状について、豊富なデータを紹介しつつ基調講演を行い、同時に、門馬清仁 同研究所総務チームリーダーが、自己啓発で修得中の韓国語をまじえて「事務室からみた国立大学法人化」というテーマで報告を行った。

ソウル大学は時あたかも「法人化問題」で大揺れの真ただ中、構内の学生掲示板には「法人化反対」のポスターも貼られている中での講演となった。そのため、日本における国立大学の法人化に関する関心は高く、また、大学教員と職員が別々の視点から報告を行った企画も好評だった。韓国側は、ソウル大学教育学部の申正澈（シン・ジョンチョル）教授が法人化賛成の立場から、同社会福祉学部の曹興植（チョー・フンシク）教授（民主化教授連合会会長）が反対（疑問）の立場から、それぞれ熱弁をふるい、会場からも物理天文学部教授、電気工学会会長、ソウル大学職員組合委員長などからコメントや質問が相次ぎ、外の寒さを感じさせない熱い半日となった。

社会科学研究所は2008年秋に、ソウル大学日本研究所と学术交流について相互に協力することに合意し、2009年3月に第1回共同シンポジウムをソウル大学で

開催した。第2回目は2010年2月に東京大学で開催する予定で、日韓両国の教育問題、格差問題、若者と文化などのテーマについて、自由闊達に意見を交換することを目的とする。また、日本研究所は今年の10月に、韓国では初めてとなる学術日本研究雑誌『イルビ The Korean Journal of Japanese Studies』（年刊、韓国語）の創刊号を刊行し、社会科学研究所はこの編集にも協力している。



パネルディスカッション風景

大学院法学政治学研究科・法学部
バーベキュー・パーティを開催

11月3日（火・祝）、大学院法学政治学研究科・法学部では、留学生および外国人客員研究員ならびに教職員の親睦を深めるため、都立潮風公園（お台場）において、バーベキュー・パーティを開催した。

当日は、10月入学者を中心に留学生が35名、外国人客員研究員が5名、そして教職員や参加者の家族を合わせて計74名が参加した。

バーベキュー・パーティの実施にあたっては、開始30分前に留学生有志と教職員が協力して、コンロと椅子テーブルの設営、調理器具と食材の配付を行った。

そして、ちょうど準備が整った頃、井上正仁研究科長を先頭に他の参加者がバーベキュー・パーティ会場に到着。12時から、井上研究科長の挨拶の後、6グループに分かれ、バーベキュー・パーティが本格的に開始した。

各グループは、肉、魚、野菜、焼きそば等を思い思いの順序で調理し、テーブルを囲んで食文化の違いや日本での生活などを話題にしながらかく楽しく談笑した。食後、全員でベイブリッジを背景に記念撮影をして14時半ごろ散会となった。

この日は、朝から富士山がくっきり見える快晴だったが、前日の晩に「木枯らし一号」が吹いた後の寒い一日となった。しかし、日中は風が弱まったので、まざまずのバーベキュー日和であった。

今回も、参加者はのびのびとリラックスした様子で、

バーベキューを通じて学生同士、そして学生と教職員との親睦が一層深まり、大変有意義な会となった。



集合写真



井上正仁研究科長（中央）と一緒に

大学院医学系研究科・医学部
医学部解剖体慰霊祭が行われる

11月6日（金）14時から、台東区谷中の天王寺において平成21年度医学部解剖体慰霊祭（解剖体数137柱）が、ご遺族約220名、医学部関係教職員約40名及びこの春教養学部より進学し、初めて解剖実習に臨んだ医学科3年の学生など約110名の合計約370名参列のもとに執り行われた。

本慰霊祭は、ご遺体を医学教育と医学の進歩発展のために捧げられた方々の御霊に感謝し、お慰めするため、ご遺族をはじめご縁故深い方々のご臨席を得て毎年実施されているものである。

住職以下7名の僧侶による読経が境内に流れた後、清水孝雄医学系研究科長による祭文の朗読、焼香が行われ、ご遺族代表、教職員総代、来賓代表の焼香と続いた。学生代表として、医学科3年の福田敬寛さんの焼香に続き、参列者全員が焼香を行った。

本堂における行事を終えた後、千人塚において僧侶による読経が行われ、隣接する医学部納骨堂での焼香を行い散会した。



解剖体慰霊祭にて祭文を朗読する清水研究科長

医科学研究所

医科学研究所で動物慰霊祭行われる

部局

医科学研究所講堂において、11月11日（水）11時から動物慰霊祭が執り行われた。医科学研究所では、数多くの動物が研究・実験に供され、医科学研究の発展に大きく寄与している。

当日は、清木元治所長の挨拶、甲斐知恵子実験動物研究施設長の報告があり、引き続きで参加者が動物の霊に思いをいたし、献花を行った。動物を利用した研究に従事する研究者を中心に300名を超える教職員等が参列し、滞りなく終了した。



慰霊のことばを述べる清木所長



献花する清木所長（右）、甲斐施設長

東洋文化研究所

講演会「はじめての漢籍」を開催



11月11日（水）、総合図書館大会議室において東洋文化研究所主催の講演会「はじめての漢籍」が開催された。

東洋文化研究所は、アジア全域にわたるさまざまな言語の図書66万冊を所蔵しており、なかでも多くの部分を占めるのが、中国の古典籍、いわゆる「漢籍」である。この漢籍について、多くの方に知識を広めてもらうことが今回の講演会のねらいである。

羽田正東洋文化研究所長の挨拶ではじまった講演会では、大木康教授が「漢籍とは？」、橋本秀美准教授が「初心者向け四庫分類解説」と題し、それぞれ漢籍という資料とその分類についての講演を行った後、石川洋助手（大学院人文社会系研究科・文学部）による「東京大学文学部漢籍コーナーの漢籍について」、小寺敦准教授による「東京大学東洋文化研究所の漢籍について」の講演があり、漢籍を数多く所蔵する2部局の状況について解説が行われた。

当日はあいにくの雨模様であったが、研究者、学生、図書館等の職員、一般市民など学内外から101名が参加し、熱心に講演に聞き入る姿が多く見られた。



羽田所長による開会挨拶



講演を聴く参加者

空間情報科学研究センター
CSIS DAYS 2009 を開催

11月12日（木）から13日（金）に、柏キャンパス総合研究棟6階大会議室において、空間情報科学研究センターの主催によりCSIS DAYS 2009（全国共同利用研究発表大会）が開催された。CSIS DAYSは、空間情報科学の最新の学術研究を広く周知し、関連する研究者の交流の場を実現するために毎年行われている学術大会であり、全国共同利用施設である空間情報科学研究センターの主要な行事の一つである。今年度は1) 自然環境、2) 都市・生活、3) システム・ツール・データ、4) 理論・交通・人口・災害、の4つのセッションが開催され、合計48件の発表が行われた。発表の形式は5分間の口頭発表とポスターセッションを組み合わせたものであり、多くの活発な議論が行われた。参加者数は約160名であった。



CSIS DAYS 2009 のポスターセッション

大学院教育学研究科・教育学部
本田教授の特別授業が教育学部附属
中等教育学校で行われる

11月13日（金）に、教育学部附属中等教育学校において、教育学研究科比較教育社会学コースの本田由紀教授の特別授業「日本社会の変化と教育」が行われた。

授業は「日本の厳しい現実を知って暗い気持ちになるかもしれないが、現状を正しく認識した上で若い皆さんの力を貸してほしい。」という先生のメッセージから始まった。1990年代バブル経済破綻以降の日本の社会構造は、「一億総中流社会」から、有利さ不利さの度合いに応じて差がつき固定化する分断された社会へと変貌した。現在の日本社会は階層の上下にかかわらず、自己責任論に代表されるような「共通の圧力」に覆われている。そのため物質的または精神的な「不幸」を皆それぞれが抱えている。本田先生は膨大な社会調査のデータからこの認識を導き出し、「家族・教育・仕事」という三つの領域にわたりグラフで示された。そしてこの背景に高度経済成長期に成立した日本型循環モデルの破綻の影響があることを図で説明された。最後に先生は、「物質と精神両面の不幸を解消するためには自己責任論から脱却して新たな『循環』を再構築する必要があり、そのために教育が果たすべき役割は大きい」と結ばれた。

授業では、グラフや図で次々示される身近で「リアル」なデータと本田先生の鋭く鮮やかな語り口に魅せられ、生徒も教員も保護者も熱心に耳を傾けた。授業後も生徒からは数多くの質問が寄せられ、強い問題意識を残したことがうかがえた。



特別授業で生徒に語りかける本田教授



11月19日(木)に、教育学部の創立60周年を記念して、記念式典および祝賀会が開催された。

記念式典は安田講堂において学内外関係者及び学生、附属中等教育学校生徒ら約570名が参列し、秋田喜代美教授の司会進行により挙行された。式辞で武藤芳照研究科長・学部長は、教育学部が今後の20年を展望して内なる力を外に示しつつ、特色ある教育・研究体制を作り上げていくことを宣言した。濱田純一総長の挨拶では、「タフネス」を培う教育の実践を支える教育学部への激励の言葉が述べられた。文部科学省清水潔文部科学審議官からの祝辞では、教育行政も含む様々な教育実践分野に対する教育学部の貢献に期待が述べられた。式典前半の最後には、「教育学部60年の歩み」と題されたスライド上演が行われ、数多くの写真とともに教育学部の歴史が回顧された。

後半の最初に教育学部4年の清水翔さんと岐部琴美さんによるピアノの演奏があり、式典に華を添えた。続いて学生を代表して大学院博士課程1年の山本貴之さんが、60年の歴史を引き継ぎ21世紀の教育界を担っていくことへの決意を述べた。最後に寺崎昌男名誉教授が挨拶を行い、創立当初の歴史的な回顧をもとに、学問と実践、教育学部と附属中等教育学校の関係を密に保つことの重要性が指摘された。

記念式典終了後、会場を神田の学士会館に移して、関係者約210名が出席し、記念祝賀会が開催された。

祝賀会では、武藤芳照研究科長の開会の挨拶後、佐藤愼一東京大学理事(副学長)の発声で乾杯が行われ、歓談に入った。歓談では、現職の教職員と教職員OB、卒業生らが教育学部の60年を振り返るとともに、今後の発展に向けて抱負を語り合った。祝賀会の途中、鈴木寛文部科学副大臣の祝辞もあり、最後に、市川伸一副研究科長による閉会の挨拶があって祝賀会は盛況のうちに終了した。



挨拶をする武藤研究科長



学部学生によるピアノ演奏



和やかな祝賀会

あなたの撮った写真を 学内広報に載せませんか？

学内広報では教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。
あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

■応募条件

1. 東大のキャンパス内で撮影した写真であること

本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。

2. デジタルデータで送付すること

撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ(jpeg、tifのいずれか)をメール添付で送ってください。

3. 1回の応募につき3枚まで受付

多量の写真データ送付はご遠慮ください。
(添付ファイルの合計容量は5MBまで)

■掲載基準&掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちたセレクション(笑)を行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します(匿名希望も可)。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

■締切

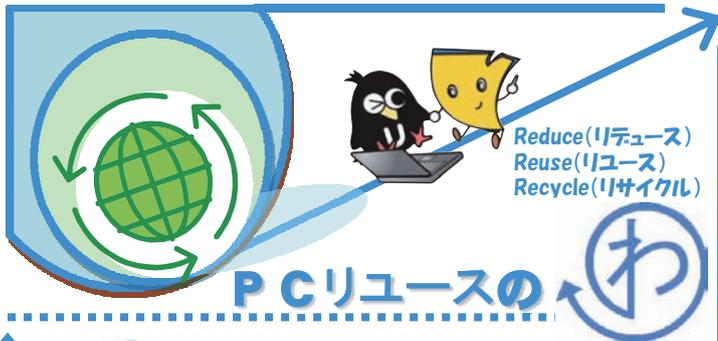
特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

■送付先

本部広報グループ広報企画チーム

「学内広報写真募集係」まで。

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



コミュニケーションの形

石原孝二

総合文化研究科 准教授

科学技術インタープリター養成プログラム執行委員

われわれは、日ごろ様々な手段でコミュニケーションをとっている。直接的・間接的に、口頭で、筆記で、メールで、ブログで、動画の投稿を通じて、等々。健常者の成人の場合は、複数の手段を通じて、また、自立的にコミュニケーションをとることが可能である。しかし何らかの障害をもつ人の場合、コミュニケーションの手段が限定されていたり、コミュニケーションをとるための特別な方法や援助が必要なことがある。

特に口頭でのコミュニケーションに障害がある場合に、筆記やタイピング等の代替手段によって行われるコミュニケーションをファシリテティッド・コミュニケーション等と呼ぶことがある。この方法は、自閉症などの発達障害をもつ人たちのコミュニケーション手段として使われることがある。驚くべきことに、口頭によるコミュニケーションがまったくできない子供(や成人)が、筆記やタイピングを通して、意思疎通をはかることができたり、文章(論文や著書)を書いたりすることができる事例が報告されている。

こうした事例は、驚くべき現象であるがために、その信頼性に対して、様々な批判が寄せられてきたし、現場でもしばしば懐疑的な目で見られているようである。キーボードの助けを借りながらも自立的にコミュニケーションをとれる場合には、本人の意思によってコミュニケーションが行われていることは疑いの余地が無い様に思われるが、援助者が手を添えたり腕を支えながら字を書いたり文字盤を指していく場合には、それが果たして利用者の本当の意思なのかどうかを判断するのが難しく思われることもあるだろう。

いずれにせよ、ファシリテティッド・コミュニケーション等と呼ばれる現象には多くの解明されるべき謎が含まれている、と言うことはできるだろう。様々な手法を使ってこの謎を解き明かしていくことは、自閉症などの障害のいくつかの側面について光をあてることになるだけでなく、健常者が行っているコミュニケーションに関しても多くの示唆を与えることにもなるのではないだろうか。

【文献】ダグラス・ビクレン『「自」らに「閉」じこもらない自閉症者たち』鈴木真帆監訳、日向裕子・金澤葉子訳、エスコアール出版部、2009年；筆談援助の会編『言えない気持ちを伝えたい』エスコアール出版部、2008年

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

第②回 えっ、232人!?

(前号から続く) なっ、なんとそこには・・・232人分もの申請書が入っていました！こんなに沢山の応募があるとは・・・と驚いたのには、実は学生さんに提出してもらう『リユースノートパソコン』使用申請書に理由があります。申請書の記載欄は、所属や氏名、連絡先、希望するリユースPCの番号の他に、「使用目的」、「指導教員の承諾」欄があります。当初、この「使用目的」と「指導教員の承諾」欄を巡ってWGで議論が交わされました。我々が一番懸念したのは、貸したPCが行方不明になり、秋葉原辺りの中古ショップやネットオークションなどでひょっこり見つかることです。本学の学生さんによもそんな悪いことを考える人はいないと思いますが、それでも安心してPCを貸与するためには些細なリスクも見逃せません。また、本当にPCを必要としている学生さんから優先的に貸与したいという思いもあります。そこで、申請書の半分くらいのスペースを「使用目的」「研究・教育計画」の記載欄にし、最後に指導教員の先生の承諾サイン欄を設けました。長々と文章を書いたり、先生にサインをもらうならと、申請を躊躇する人もいるかもしれない。でも本当にPCを希望する学生さんなら、これらのハードルを越えて熱意を籠めた申請書を提出してくるはず、そう考えたのです。

とはいうものの、ハードルが少々高すぎやしなかったかと、不安は残りました。しかし我々の不安は杞憂に終わりました。修論・卒論に、就活に、普段の授業や実験に、サークル活動にと、様々な目的や計画がぎっしり書いてあります。先生方も快くサインをしてくださったようです。駒場キャンパスで偶然お会いしたH先生は「私も昨日学生から頼まれてサインしましたよ」と声をかけてくださいました。

こうして、232人の熱の籠った申請書を前に、予定の3倍ほど時間をかけてじっくり選考を行い、37人の学生さんに順次引き渡しました。みなさん、大切そうに受け取ってくれたのが印象的でした。

ところで、これらのリユースPCですが、学生さんに1日でも早く渡したいと、美津野商事さんが突貫工事で再生作業を行ってくれました。その美津野商事さんを次回ご紹介したいと思います。(青)



PCを受け取ってニコリ留学生のお二人です

★10月・11月各部署ご提供PC☆

工学部 28台	東洋文化研究所 13台	医科学研究所 6台
教育学部 4台	生産技術研究所 2台	人工物工学研究センター 2台
柏地区事務部 2台	数理科学研究科 1台	物性研究所 1台
理学部 1台	教養学部 1台	農学部 1台

以上62台のノートPCは次回の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きよろしくお願いたします。

● 問い合わせ先: ノートPCリユースオフィス (本部資産経営G内)

E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
URL : <http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/>
内線: 22135(担当 青木・高橋)

● ノートPC回収先: 美津野商事株式会社システム事業部

E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共に紹介していきます。

知財シンポジウム

国際的特許スキームの進化に向けて

政策ビジョン研究センターでは、11月12日(木)、日本知財学会及び京都大学と連携して、「アジア知財学会議」を主催致しました。

アジアワイドで学会や大学が組織的に協力し、知的財産システムに関する政策提言を行おうとするこのような試みは、初めてのものです。日中韓の学会等の6つの学術団体、10の大学の知財専門家が参加しました。また、アメリカからアメリカ特許商標庁のデュダス前長官ほかの有識者の方々にも参加いただきました。

この会議において、イノベーション活動や特許行政において、大学が保有する知的財産の重要性が高まっており、また、学術研究活動においても、知的財産権制度や運用が広く影響を与えるようになってきているとの共通認識の下、インテンシブな議論を行い、**7つの提言**(「日米欧三極知財シンポジウムへのアカデミアからの提言」)を取り纏めました。

また、この提言は、同日午後開催された「日米欧三極知財シンポジウム(日米欧の特許庁長官が参加)」において、会議代表の渡部俊也教授(東京大学政策ビジョン研究センターイノベーションと知財研究ユニット責任者、先端科学技術研究センター教授)他から、早速、メッセージとして発信されました。会議の参加者より、学術と産業技術の接近等を踏まえ、知財制度のユーザーとしての大学から提言は、大変有用であり、また、研究機関としての大学には、グレースピリオドがイノベーション活動に与える影響等についての制度検討の前提となる学術的研究を期待したい等との発言がありました。

今回のような学術団体が国際的に集まり、制度当局との対話を行うという枠組み自体、新しいものでありますが、この動きは、東京大学・京都大学による「未来を創造する特許制度のための15の提言(2009年6月)」を受けたものです。今後、「世界知財学会議(仮称)」を設け、継続的に意見の交換と提言の発信を行っていく予定であり、政策ビジョン研究センターは、その中心として活動していきます。



アジア知財学会議

日時：2009年11月12日(木)午前
場所：京都大学 芝蘭会館 山内ホール(非公開)
主催：日本知財学会、東京大学(政策ビジョン研究センター等)、京都大学
Unit：知的財産権とイノベーション研究ユニット

日米欧三極知財シンポジウム

日時：2009年11月12日(木)午後
場所：京都大学 芝蘭会館 稲盛ホール(200名収容)
主催：特許庁
協力：東京大学ほか

「日米欧三極知財シンポジウムへのアカデミアからの7つの提言」

今日のイノベーションにおいては、グローバル化、オープン化が急速に進展しており、その波は止めることが出来ない。また、製品毎に関与する権利数の増大と知財の集積的利用、権利主体と知財流通の多様化等といった大きな質的变化も生じている。

さらに、グリーンイノベーションや医療等の領域で、学術と産業技術の接近が顕著となり、知財制度のユーザーとしての大学・研究機関の存在感が高まっている。大学側から制度をみると、知財制度が大学の研究活動に影響を与えていると広く認識されている。

このような変化を踏まえ、プロイノベーション、グローバル化対応、オープンイノベーション推進の3つの視点から、7つの知財システム改革を提言する。

1. 日米欧韓中の5カ国主導による特許制度等のハーモナイゼーション
2. 日米欧でのグレースピリオドの調和
3. 非特許文献の共通データベース及びサーチシステムの早期構築
4. 非実施機関としての大学の特性を踏まえた制度的検討の推進
5. 国際的な産学共同研究のあり方に関する国際的な議論の「場」の設置
6. 知財人材育成に関する国際協力・交流の展開
7. アカデミア・大学の意見を知財制度に反映させる仕組みの継続的整備 - 「世界知的財産学術会議」の創設



写真：1,3 アジア知財学会議 / 2 日米欧三極知財シンポジウム

政策関連用語集

政策ビジョン研究センターでは、各研究ユニットの最先端の研究内容をよりご理解頂けるよう、政策関連用語集を作成し、ホームページに掲載しました。今後順次用語数を増やしていく予定です。ご利用ください。

日仏合作グライダー100年記念講演会 航空政策研究ユニット

12月9日(水)、安田講堂にて、日仏合作グライダー100年記念講演会式典が開催されました。当日の様子は次号にて、ご報告します。

INTERVIEW

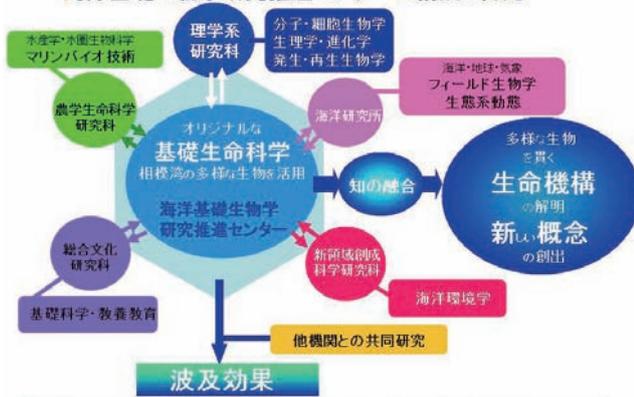
海洋基礎生物学研究推進センター
赤坂 甲治 センター長

今回ご紹介するのは、今年6月に設置された「海洋基礎生物学研究推進センター」です。活動の拠点となっている三崎臨海実験所は世界で最も歴史のある臨海実験所の一つとして現在に至っており、その歴史は、東京大学理学部動物学教室初代教授のエドワード・モース（大森貝塚の発見者として有名）まで遡ります。このような背景の中で、我が国の海洋基礎生物学共同利用・共同研究拠点としても邁進するセンターについて、赤坂センター長にお話を伺いました。

Q. 海洋基礎生物学とはどのような学問なのでしょうか？

赤坂 海洋生物というと、養殖技術などをもっと先に思い浮かべるかもしれませんが、私たちが目指しているのは生命が共通に持つ機構の解明です。海洋生物と人間は姿も形も全く異なりますが、元を辿れば同じ起源を持つ生命です。たとえば、ウニには目も脳もありませんが、実は目や脳を作る遺伝子が確認されています。さらにウニのゲノムを解析してみると、遺伝子レベルでいえば人間との共通点がたくさんあるのです。このような海洋生物の研究により、果ては私たち人間の身体のメカニズムを解明することにも繋がります。私の研究では、ウニに他の遺伝子の働きを遮断する特定のDNAを発見し、特許を取得していますが、これを応用することで、骨髄の遺伝子医療や医療用の家畜などの開発が可能になると考えます。実際にこうした海洋生物学の研究が、ノーベル医学生理学賞や化学賞に結びついた例も少なくありません。海洋基礎生物学は、元来の自然科学が持っている純粋な知的欲求に依る学問ですが、また同時に、その波及効果として、先端医療などに役立てることができる可能性を持っているのです。

海洋基礎生物学研究推進センターの構成と目的



Q. 発足の経緯についてお聞かせください。

赤坂 私たちが拠点としている三崎臨海実験所は、相模湾の中央部に位置します。実は相模湾の生物相は、世界一と自負出来るほど、たくさんのプランクトンと多様な生物に恵まれています。特に様々な沿岸環境が複雑に絡み合った結果、「生きた化石」と呼ばれる貴重な深海生物が多く生息する、世界的に見ても稀な環境を築いています。このような恵まれた環境にあって、120年前に実験所が設置されて以来、国内外の研究者が訪れ研究に役立てています。一方で、理学系研究科の多大なる支援を受けているものの、欧米と同等に渡り合い、研究成果を世界へ発信していく窓口として活動していくには、研究者の数や予算など、欧米の実験所に比べると規模が小さいことが問題でした。

総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

そんな中、筑波大学と海洋生物学研究共同推進拠点として連携していくという話が浮上し、それならば部局附属ではなく全学的な組織として活動していこうと、海洋基礎生物学研究推進センターを立ち上げたのです。

Q. 筑波大学との共同利用・共同研究拠点ということですが？

赤坂 日本国内には各大学が運営する臨海実験所が点在しており、各々の臨海実験所を繋ぐネットワークが確立されています。今回本学と筑波大学が合同で共同利用・共同研究拠点となることで、私たちが日本の海洋基礎生物学を代表して窓口となり、世界中の臨海実験所と手を結ぼうという意図があります。



海洋基礎生物学研究推進センター長赤坂甲治教授

今年の10月末には、ナポリで国際海洋生物学ネットワーク（GMBN）が旗揚げされました。アジアからは本学と筑波大学が参加し、さらにアメリカ、カナダ、ヨーロッパと、世界中の機関を結ぶネットワークが誕生しました。今後はより参加地域を広げ、リソースの共有や、国際海洋基礎生物学会の設立など意欲的に活動をしていきたいと考えています。

Q. 今後の課題は何ですか？

赤坂 欧米では海洋生物の研究と、その波及効果である特許の獲得という流れがシステムとして機能していますが、日本ではまだこうしたニーズも少なく、豊富なリソースがあるにもかかわらず、なかなか活用できていない現状があります。この一因として日本では海洋基礎生物学の意義について、国民の認知が低いことがあるでしょう。私たちの研究は短いスパンで研究成果が出るわけではありません。あるいは20年、30年かかる研究によって、私たちの生活にはなくてはならない技術や革新的な医療技術が生まれることがあるわけですが、現在、私たちは一般の方向けに公開実習を行い、豊富な海洋生物資源を肌で体験してもらうことで、生物多様性の重要性や環境問題はもちろん、また海洋生物にどれだけの利用価値があるかということを考える機会を提供できればと考えています。また、施設の利用に関しては、従来以上に多くの方に利用してもらいたいと考えています。欧米では医学分野の研究者が、夏期休暇を利用して臨海実験所に滞在し、そこで得た情報や実験成果をもとに医療に役立つ研究を行うということが日常的に行われていますが、日本ではそのように臨海実験所を利用するケースは多くありません。日本でも様々な分野の研究者が日本の持つ豊富なリソースを使うことで、世界的に見ても重要な研究成果が生まれると信じています。

来年の3月には、学生や研究者向けに1週間の実習プログラムを行う予定です。今後も定期的にこうしたプログラムを行い、当施設の利用を促すとともに、本学の、また日本の海洋基礎生物学を発展させ、世界に太刀打ちできるものにしていきたいと考えています。

● 関連ホームページ ●

海洋基礎生物学研究推進センター:

<http://www2.mmbs.s.u-tokyo.ac.jp/marinebio/>

(インタビュー: 山縣、泉)

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線21385)

Crossroad:

交差道路や、道が交差するところにある集会場を意味します。産業界と研究者のクロスする場所の意味をこめます。

北京大学生との交流でグローバルな視点を



第5期「東京大学アントレプレナー道場（学生起業家育成プログラム、産学連携本部主催）」のビジネスプランコンテスト参加学生からなる選抜チームと、北京大学ビジネスプランコンテスト（共青团北京大学委員会主催、本年度は第11回目）参加学生との学生交流会が11月5日（木）～7日（土）に行われました。このプログラムは、東京大学と北京大学の密な関係の中で昨年度より開始され、両校の学生同士が互いに訪問し交流し合うことで、学生起業家として、よりグローバルな視点を身に付けようとするものです。

今回は、コンテストを勝ち抜いた本学学生10名が北京大学を訪れ、本プログラムは北京大学共青团北京大学委員会副主任の鄭清文氏による歓迎挨拶に始まり、本学産学連携本部長の影山和郎教授のスピーチで幕を開けました。その後、学生チームによるプレゼンテーション（東京大学3チーム、北京大学3チーム）が行われ、両校学生による活発な質疑応答が交わされることで、更なるビジネスプランのブラッシュアップが図られました。また北京大学学生の案内による北京市内の視察などによってより交流が深まり、両校参加学生にとって充実した学習の場となりました。

2010年2月には北京大学学生が東京大学を訪れ、更に発展させたビジネスプランをもとに活発な討議を行う予定となっています。

ビジネスフェアで産学官連携をPR

11月5日（木）、新宿NSビルにて、西武信用金庫・TAMA協会共催の第10回ビジネスフェア from TAMA「輝ける未来に向けて」が開催されました。

同フェアは、首都圏、新潟県、山梨県にある中小企業の優れた技術・製品等を互いにPRし、「他企業とのマッチング」ならびに大学等との「産学官連携」を図ることを目的としています。すでに産学連携研究推進部では、西武信用金庫と金融機関版Proprius21（共同研究新スキーム）を行っており、その中で中小企業数社との共同研究を創出しています。

産学連携本部のブースでは、共同研究につながるシーズ等の検索がWEBで行える「東京大学産学連携プロポーザル」システム（詳細は下段で説明）のデモンストレーションを行いました。ブースに訪れた中小企業の経営者を中心に、のべ100名近い人々に、東京大学との産学連携を進める「きっかけ作り」の仕組みを説明しました。

このような地道なPR活動をすることで、産学連携の発展につながる事が期待されています。



産学連携本部 紹介コーナー

TLF (テクノロジー・リエゾン・フェロー) のみなさん

産学連携本部には、自治体等公的機関の職員を対象とした、大学・産業界・官公庁との間の産学官連携を推進・管理する専門家育成のための、TLF研修制度があります。今年度研修にきている第10期TLFの6名のみなさんを、2回にわたってご紹介します。



写真左より、萩原 茂さん(山梨県)、有賀 俊さん(東京都文京区)、末澤保彦さん(香川県)、清水芳忠さん(神奈川県)、上野 桂さん(青森県)、森田英樹さん(奈良県)

東京大学産学連携プロポーザルのWEB画面。東京大学の全分野をカバーする約1,850件の提案テーマのデータベース。ほぼ毎日更新されている。
<http://proposal.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

第10期テクノロジー・リエゾン・フェロー（以下TLF）の6名のみなさんの研修の1つとして、共同研究テーマ提案WEB検索システム「東京大学産学連携プロポーザル」（左下参照）の運営があります。東京大学教員から学外へ向けての研究情報・テーマ情報を発信するWEBサイトですが、サイトの作成・更新にあたっては、教員インタビューが重要な業務です。インタビューはProprius21プログラムオフィサー（以下PO）と一緒に回りますが、事前準備もTLFのみなさんの仕事の1つ。インタビュー対象教員の最近の研究内容をWEBで集めたり、著書などにも目を通したりするなど、下準備に余念がありません。今まで自分が知らなかった研究内容に触れることで、知的好奇心が芽生え、もっと掘り下げて学習したいと思うこともあるとか。また、企業経験が長いPOから、企業組織の仕事の進め方も学ぶことができ、大学と企業と両方の側面から物事を見る目を養うことができるようになったそうです。

地方から研修に来たTLFの方にとっては、文化の中心である東京は魅力ある街の1つ。休日は美術館や博物館に行ったり、話題のスポットにも足を運んだりして、1年間の東京生活を満喫されているようです。



連絡先：産学連携本部（本部産学連携グループ）
電話：内線22857（外線03-5841-2857）
WEBサイト：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo

ワタシのオシゴト / 第46回

Rings around the UT

本部資産経営グループ グループ長

川口 安名さん

公私ともリーマン・ショック



デスクにて

「資産管理」から「資産経営」へ、頭の切り替えに奮闘しながら、気がつけば九か月が過ぎようとしています。キャンパス整備計画を進める上で重要な位置を占める処分財産の売払いや一時的に使用する計画がない土地等の有効活用に取り組んでいます。特に、昨秋のリーマン・ショック後の不動産不況から脱していない経済状況の影響を直接受けることになるとは担当するまで予想もしていませんでした。また、業務上の専門用語に悪戦苦闘しながら、日々適度な緊張感を持って、仕事をしています。

休日は、早起きと朝食の準備、それと愛犬（ペコ）との散歩が唯一の楽しみではあるが、なぜか散歩が嫌いなので、ここでも悪戦苦闘しています。また、我が家にとって最大の関心事である息子の就活も仕事と同様にリーマン・ショックの影響？から内定がない状況です。良い情報があればご一報を。



散歩嫌いの愛犬(ペコ)

得意ワザ：強面（みたまま）

自分の性格：出た所勝負

次回執筆者のご指名：茅根修様

次回執筆者との関係：農学部繋がり

次回執筆者の紹介：クレーム対応のプロ

コミュニケーションセンターだより No.63

■第60回駒場祭 ー今年も出店して参りましたー

银杏の色づく中、今年も駒場祭に出店して参りました。

悪天候が危ぶまれましたが、雨が降る事もなく非常に楽しい3日間を送ることが出来ました。通常の出店では「光触媒シート」がダントツの人気ですが、忘年会のシーズンだからでしょうか、今回は東大サプリメント「体力式アミノ酸」そして「乾杯式アミノ酸」も大好評でした！！

東大サプリメントシリーズを愛用しているUTCCスタッフも多く、お客様に気に入って頂ける事をとても嬉しく感じています。

皆さん是非一度東大サプリメント、お試し下さい！！



東大サプリメント
「体力式アミノ酸」2,205円（税込）
「乾杯式アミノ酸」1,554円（税込）

■駒場祭での一コマ

～歴史ある水泳部による「河童踊り」～

駒場祭では恒例の水泳部による「河童踊り」。

特徴的な甲羅の皿、くちばしを付け、蓑を身にまとった河童たちが部歌である「さざり」を歌いながらキャンパス内を練り歩くという伝統的なイベントが毎年駒場祭で行われています。

寒空の中で頑張っている学生の姿には本当に勇気を与えられました。

当UTCCでは、現役の水泳部員、水泳部OBの学生がスタッフとして多数所属しています。今回は普段、店では見ることの出来ないスタッフの河童姿を公開しちゃいます！！



教養学部理科二類2年
濱田 大樹



工学部航空宇宙工学科3年
山本 龍志

(担当：UTCC 山下)



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～

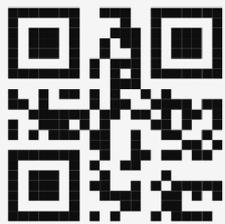


東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



東大ナビ
はじまる

ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。
または mail@utnav.jp に空メール!

東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jp に空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ

※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

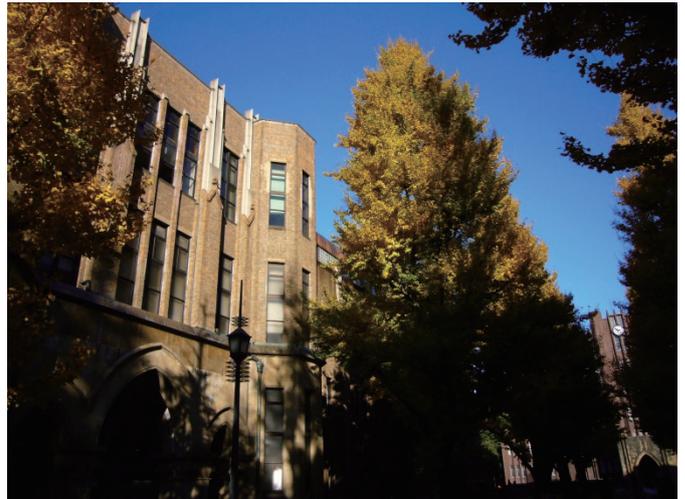
携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
 - イベント掲載フォームから送信！
 - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線；27823
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟403号室

読者投稿写真 No.7

大空と



昨年12月7日に法文1号館前で撮影した写真です。銀杏並木がとてもきれいに紅葉していました。澄みきった青空を見ると、運動会歌「大空と」の歌詞が浮かんできそうです。

＜東京大学運動会歌＞
大空と澄みわたる淡青
巖たり我が旗高く開かん
仰げよ梢を銀杏のこの道

：

北原白秋はこの写真のような光景を歌にしたのでしょうか？
そんな思いをめぐらせました。

(撮影：工学系研究科 博士課程3年 川中孝章さん)

平成21年度 学内広報発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1395	1月 6日(水)	1月 25日(月)	1月 29日(金)
1396	1月 29日(金)	2月 19日(金)	2月 25日(木)
1397	2月 25日(木)	3月 19日(金)	3月 26日(金)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
【東京大学ホームページ】
→【左下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



INFORMATION

お知らせ

お知らせ

退職教員の最終講義

学内広報では、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

大学院法学政治学研究科・法学部

奥脇 直也 教授

(国際組織法)

日時：1月26日(火) 18:00～19:00

会場：法文1号館22番教室

演題：「国際法における合法性観念の変容」

大学院人文社会系研究科・文学部

上野 善道 教授

(言語学研究室)

日時：1月30日(土) 15:00～17:00

会場：法文2号館1番大教室

演題：「私のアクセント研究」

海洋研究所

宮崎 信之 教授

(海洋科学国際共同研究センター、企画情報分野)

日時：1月22日(金) 15:00～16:00

会場：海洋研究所講堂

演題：「海の哺乳動物と私」

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第525(12月2日)号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第525号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

田中純：大樹の下で見た夢——東大駒場新能観能記

石橋純：ラテンアメリカ民衆文化に学ぶ合奏のつどい「エストゥディアンティーナ駒場」デビュー

代田智明：並木頼壽先生を偲んで

〈駒場をあとに・おくることば〉

青木誠之：お礼のことばに代えて

池田信雄：青木先生を送る言葉

兵頭俊夫：偶然、偶然、そして批判的思考

齋藤晴雄：兵頭俊夫先生を送る

山脇直司：〈本の棚〉中島隆博著『哲学』

独創的な哲学論を開陳

森 芳樹：〈時に沿って〉黄葉のころ

教養学部後期課程ガイダンス(12/10)

第8回演奏会(12/21)

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

演習林の広報誌「科学の森ニュース No.48」の発行

「科学の森ニュース」は3ヶ月に1回発行している演習林の広報誌で、12月10日(木)にNo.48を発行しました。演習林の最近の話題を始め、動植物や名所を紹介するシリーズも載っています。広報センター、農学部正門、農学系事務部、弥生講堂等で配布している他、演習林のホームページからもご覧になれます。

【科学の森ニュース No.48 目次】

〈トピックス〉

旭川 森林の市(もりのいち)に出店しました

北海道演習林

フィールドで考える野生動物の保護管理

千葉演習林

みどりの海・東大演習林で源流たんけん隊

愛知演習林

平成 21 年度 技術職員等試験研究・研修会議が開催されました

富士演習林

〈クローズアップ〉

アジア大学演習林シンポジウム

－気候変動と大学演習林の役割－

国際交流委員会 鎌田直人

〈演習林のイベントダイジェスト〉

〈科学の森の動植物紹介〉

オオワシ・オジロワシ

北海道演習林

〈名所・名物案内〉

富士山景観観測塔

富士演習林

演習林のホームページ

<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/>



お知らせ

本部広報グループ

広報センターの年末年始休館のお知らせ

今年一年間のご利用ありがとうございました。
 学内の皆さまには、閲覧・配布資料のご提供を賜りましてお礼申し上げます。
 1995年の開設からご利用者の数は毎年増えて、月間の集計が1,000人を超えることも多くなりました。来年もご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願いいたします。

下記のとおり休館させていただきます。

12月26日(土)～1月4日(月)

*年始は1月5日(火)10時より開館いたします。

お知らせ

保健・健康推進本部

年末年始の業務について

保健・健康推進本部(各地区保健センター)では、年末年始期間中(12/28～1/4)は、通常の診療日程を変更して、業務を行います。ご利用の際にはご面倒でも必ずホームページや電話等で確認のうえ、お越しく下さるようお願いします。
 お手数をおかけしますが、よろしくをお願いします。

【お問合せ先】

本郷地区事務室 内線：22575 外線：03-5841-2575
 URL：<http://www.hc.u-tokyo.ac.jp/hhomeflame.htm>
 駒場地区事務室 内線：46080 外線：03-5454-6080
 柏地区事務室 内線：63040 外線：04-7136-3040

お知らせ

情報基盤センター

新春の“情報探索ガイダンス”ご案内

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを開催しています。

パソコン実習を交えた、わかりやすい説明で好評です。本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

●日程・コース概要：

■1/15(金)13:30～14:30

文献リストをサクッと作成～RefWorksを使うには～

Web上で使える文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■1/20(水)12:10～12:40

電子ジャーナルで論文を入手(30分のクイック講習会)

電子ジャーナル等で目的の雑誌論文を入手する方法をコンパクトに解説します。

■1/21(木)15:00～16:00 日本の論文を探すには？

日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii(サイニイ)」の使い方を中心に解説します。

■1/26(火)16:00～17:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各

種文献の探し方を、まとめてコンパクトに実習します。

■ 1/29 (金) 12:10 ~ 12:30 自宅から検索するには?
(20分のワンポイント講習会)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCS アカウント認証による SSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

●会 場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●参加費：無料

●予約不要

各回先着12名。直接ご来場ください。

●専門分野にあわせたオーダーメイドの講習会受付中。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。既成の講習会では物足りない、という方にお奨めです。

卒論指導や進学予定者のガイダンスなど、授業の1コマや、ゼミなどにご活用ください。

ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。(無料)

下記サイトをご参照ください。

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>

●講習会やデータベース情報などを見逃さないために。

Litetopi メールマガジン発信中。

当発行の Litetopi (リテトピ) メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記までメールでご連絡ください。(無料)

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>



お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

第66回小石川植物園市民セミナーのご案内

小石川植物園後援会が主催する第66回小石川植物園市民セミナーが、日本植物園協会による環境教育講座との共催として、下記の通り開かれます。今回は、武田薬品工業株式会社・京都薬用植物園園長の渡辺斉氏による、アワヤキビなどのいわゆる雑穀と食に関する講演です。

食事のあり方と雑穀の重要性、雑穀の植物としての特性、雑穀の利用と系統保存等、様々な角度から雑穀を学び再認識する、またとない機会です。本学関係者に限らず、どなたでも参加できます。どうぞ皆様お誘い合わせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

講師：渡辺 斉 (武田薬品工業株式会社・京都薬用植物園園長)

演題：「食：雑穀の利用拡大と系統保存」

日時：2月20日(土) ①10:00~12:00、②13:30~15:30の2コースから選択

場所：大学院理学系研究科附属植物園本園(小石川植物園)柴田記念館

参加費：無料(但し、一般の方は入園料が必要です)

参加申込方法：2月12日(金)までに、ご希望の時間をご指定の上、往復葉書または電子メールにて後援会までお申し込み下さい。返信葉書ないし返信メールが招待状となります。なお参加ご希望多数の際は、お申し込み順に従い受付が締め切られることがあります。悪しからずご了承下さい。

主催・参加申込先：〒112-0001 文京区白山3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
小石川植物園後援会

koishikawa-koenkai@koishikawa.gr.jp

問い合わせ先：大学院理学系研究科附属植物園

杉山宗隆准教授 (03-3814-0368)

お知らせ

本部入試グループ

平成22年度入学者募集要項配付

〈不測の事態が発生した場合の諸連絡〉

災害、新型インフルエンザのまん延等により不測の事態が発生した場合、本学入学者選抜に関する情報提供は次のWebサイト等により行うので、出願及び受験の直前は特に注意すること。

【東京大学トップページ > 東京大学[受験生の方へ]】

平成 22 年度の本学の入学者募集要項が決定し、11 月 14 日（土）から入学志願者に配付されている。

募集要項配付場所

「本郷地区」

正門、赤門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、東大生協（安田講堂売店、書籍部）

「弥生地区」

農学部正門

「駒場地区」

教養学部正門、コミュニケーションプラザ北館 1 階生協購売部

※ 東京大学 Web サイトからも請求できる。

テレホンサービス

募集要項の請求方法（郵送）、出願状況（出願者数及び倍率）並びに追加合格の有無等について、テレホンサービス（電話番号：03 - 3818 - 9900）を行う。

募集人員、試験期日、試験場、合格発表日などは次のとおりである。

募集人員

募集人員（人）		前期日程（人）	後期日程（人）
文科一類	3,061	401	100
文科二類		353	
文科三類		469	
理科一類		1,108	
理科二類		532	
理科三類		98 ※	
計	3,061	2,961	100

※現在、理科三類の若干名の募集人員増について、文部科学省に認可申請予定であり、変更があり得る。

なお、認可後あらためて本学 Web サイト等で周知する。

出願期間

平成 22 年 1 月 25 日（月）～平成 22 年 2 月 3 日（水）まで

試験日

前期日程 平成 22 年 2 月 25 日（木）・26 日（金）

後期日程 平成 22 年 3 月 13 日（土）

試験場

前期日程

科 類	試験場
文科一類	東京大学 教養学部
文科二類	
文科三類	
理科一類	東京大学
理科二類	法・文・経済・教育・
理科三類	薬・医・理・工・農の各学部

後期日程

科 類	試験場
全科類 (理科三類を除く)	東京大学 法学部

合格者発表

○第 1 段階選抜合格者発表

前期日程

平成 22 年 2 月 10 日（水）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の大学入試センター試験「試験場コード」及び「受験番号」を掲示する。

後期日程

平成 22 年 3 月 10 日（水）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の大学入試センター試験「試験場コード」及び「受験番号」を掲示するとともに、合格者には電子郵便（レタックス）により「合格通知書」を、また、不合格者には、「不合格通知書」を送付する。

○合格者発表

前期日程

平成 22 年 3 月 10 日（水）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の第 2 次学力試験受験番号を掲示するとともに、合格者には電子郵便（レタックス）により「合格通知書」を送付する。

後期日程

平成 22 年 3 月 23 日（火）13 時ごろ、本郷地区キャンパス内（弓道場前）に合格者の第 2 次学力試験受験番号を掲示するとともに、合格者には電子郵便（レタックス）により「合格通知書」を送付する。

お知らせ

本部入試グループ

平成 22 年度入試に伴う臨時措置（本郷キャンパス）について

I 平成 22 年度大学入試センター試験及び第 2 次学力試験（前期日程）の実施に伴う入構制限等の臨時措置（本郷関係）について

平成 22 年度の大学入試センター試験（平成 22 年 1 月 16 日（土）、17 日（日））及び第 2 次学力試験 前期日程（平成 22 年 2 月 25 日（木）、26 日（金））の実施のため、次のとおり入構制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験

平成 22 年 1 月 15 日（金）

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第 2 次学力試験（前期日程）

平成 22 年 2 月 24 日（水）

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

平成 22 年 2 月 25 日（木）、26（金）

試験当日のため、授業は休止する。

2. 試験場区域

試験場区域を次のとおり設定する。

(1) 本郷区域（本郷地区から本部棟・附属病院・第二食堂建物・環境安全研究センターを除く区域）

(2) 農学部区域（弥生地区から地震研究所・農学部グラウンド・野球場を除く区域）

(3) ただし、大学入試センター試験にあつては、「(1) 本郷区域」のみとし、(1) 及び (2) の区域に通じる陸橋は封鎖する。

3. 入構制限等

(1) 入構許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」は入構できるが、その他の者の試験場区域への入構は禁止する。なお、入・出構の際は、警備担当者の指示に従うこと。また、試験場区域においては、試験の妨げにならないよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入構に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

① 「本学教職員」……「身分証明書」

※「入試実施本部関係教職員」は、「入試統一腕章」を着用する。

② 「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」……「学生証・研究生証」

③ 「特に入構を許可された者」……「入試特別入構証」
※「入試特別入構証」は、大学入試センター試験用及び第 2 次学力試験（前期日程）用の 2 種類とする。

4. 試験場区域への入・出構は、次によるものとする。

(1) 本郷区域

① 「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」
正門、赤門、弥生門、薬学ゲート、理学部 1 号館と化学館裏の間、二食ゲート

② 「受験者」

正門、弥生門、薬学ゲート、理学部 1 号館と化学館裏の間、二食ゲート

ただし、大学入試センター試験にあつては、二食ゲートは使用できない。なお、赤門からの入構は、正門の混雑時及び雨天、降雪時に限り中央実施本部の判断により行う。

(2) 農学部区域

① 「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」
農正門及び南門

② 「受験者」

農正門

(3) 上記の各門及びゲート以外からの立ち入りを禁止する。

なお、龍岡門及び池之端門は平常通りとする。また、懐徳門と西片門は封鎖する。

備考

1. 報道関係者等

「報道関係者等」は、腕章による識別ではなく、広報委員長の発行する「入試特別入構証」により入構を認める。

なお、報道関係者等への対応は広報委員会を通じて行う。

2. その他

(1) 試験場区域への車両による入・出構は、原則として認めないが、やむを得ない事由のある者の入・出構は、薬学ゲート、二食ゲート及び弥生門、農正門とする。但し、オートバイについては、エンジンを切った場合のみ入・出構を認める。

(2) 附属病院の業務は平常通りとなっており、附属病院の業務に関連して、試験場区域に入構する必要がある場合には、「教職員」については「身分証明書」、「学生・研究生」については「学生証・研究生証」、「その他の者」については「入試特別入構証」を必ず提示すること。

Ⅱ 平成 22 年度第 2 次学力試験（後期日程）の実施に伴う入館制限等の臨時措置（本郷構内）について

第 2 次学力試験 後期日程(平成 22 年 3 月 13 日(土))の実施のため、次のとおり入館制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

第 2 次学力試験（後期日程）

平成 22 年 3 月 12 日（金）

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

平成 22 年 3 月 13 日（土）

試験当日のため、授業は休止する。

2. 試験場

法文 1 号館

3. 入館制限等

試験当日は、試験場を設定した当該建物への「受験者」及び「入試関係教職員」以外の立ち入りは原則として禁止する。

4. 試験場への入館

「受験者」及び「入試関係教職員」の出入口については、各建物の指定された場所とする。

備考

1. 報道関係者

報道関係者の入館及び構内での取材については、広報委員会を通じて行う。

Ⅲ 平成 22 年度第 2 次学力試験合格発表（前期日程）の実施に伴う車両通行規制の臨時措置（本郷関係）について

平成 22 年度の第 2 次学力試験 前期日程合格発表(平成 22 年 3 月 10 日(水))の際、受験者等の安全確保のため、次のとおり通行規制の臨時措置をとることとする。

1. 規制区域

医学部本館前ロータリー～赤門～正門

2. 規制時間

11:00～15:00

3. 規制車両

自動車及びオートバイ（合格発表関係車両を除く）

4. 注意事項

上記 2 の規制時間帯以外でも、車両での通行の際は、

受験者等の安全確保を第一に考え、通行すること。

お知らせ

本部入試グループ

平成 22 年度入試に伴う臨時措置（駒場関係）について

○ 平成 22 年度大学入試センター試験及び第 2 次学力試験（前期日程）の実施に伴う入館制限等の臨時措置（駒場関係）について

平成 22 年度の大学入試センター試験（平成 22 年 1 月 16 日（土）・17 日（日））及び第 2 次学力試験前期日程（平成 22 年 2 月 25 日（木）・26 日（金））の実施のため、次のとおり入館制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験関係

平成 22 年 1 月 15 日（金）

試験場準備のため、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第 2 次学力試験（前期日程）関係

駒場キャンパスにおける授業ならびに学期末試験は終了しているので、この措置はとらない。

2. 試験場区域

試験場区域を別図のとおり設定する。入試当日は黄・黒のロープによって、その境界を明示する。

3. 入館制限等

(1) 入館許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入館を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入館を許可された者」は入館できるが、その他の者の入館は禁止する。なお、試験場区域においては、試験の妨げにならないよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入館に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

① 「本学教職員」・・・「身分証明書」

② 「研究のために特に入館を必要とする本学学生・研究生」・・・「学生証・研究生証」

③ 「特に入館を許可された者」・・・「入試特別入館証」

(3) 受験者の入・出館は、大学入試センター試験及び第 2 次学力試験（前期日程）とも、正門のみとする。

(4) 「本学教職員」、「研究のために特に入館を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入館を許可された者」の入・出館は、正門（バレーコート脇含む）及び坂下門横とする。

(5) 入試当日、西門・北門（野球場門）・裏門・炊事門・梅林門は閉鎖する。

備考

1. 報道関係者等

報道関係者等は、腕章による識別ではなく、本学広報委員会の発行する「入試特別入構証」を所持する者のみ入構を認める（報道関係者の取り扱いは、本学広報委員

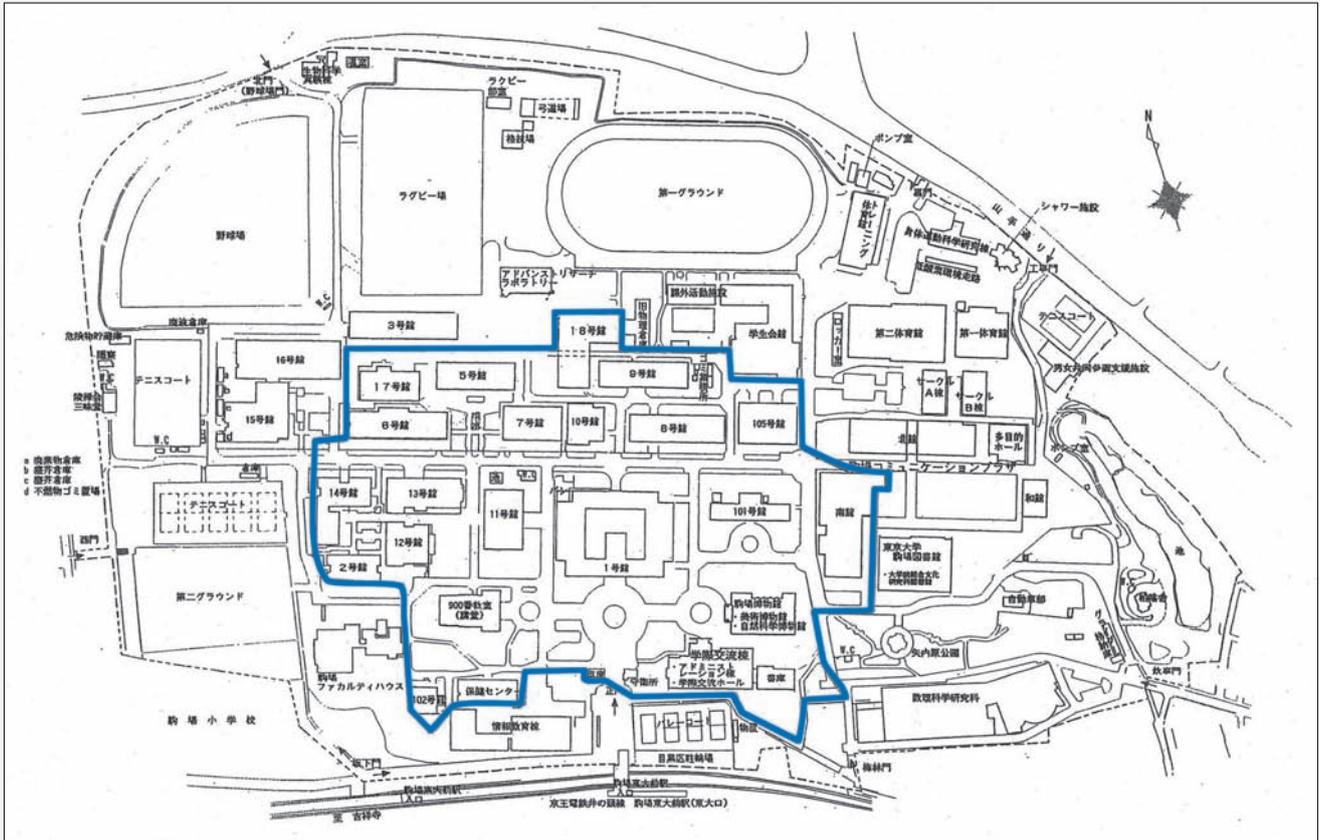
会を通じて行う）。

2. 「入試特別入構証」の発行

「入試特別入構証」の発行手続きは、本部総務グループ総務チームで行う（報道関係者を除く）。

3. その他

入試当日、車輛の入構は原則として禁止する。



事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

氏名	異動内容	旧（現）職等
(採用)		
21.12.1 本田 賢也	大学院医学系研究科准教授	大阪大学大学院医学系研究科准教授
21.12.1 平林 由希子	大学院工学系研究科附属総合研究機構准教授	山梨大学大学院医学工学総合研究部助教
(昇任)		
21.11.16 鈴木 克幸	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.11.16 藤井 恵介	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科准教授
21.11.16 西野 成昭	大学院工学系研究科准教授	人工物工学研究センター助教
21.11.16 松田 浩一	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター准教授	医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター助教
21.11.16 武山 健一	分子細胞生物学研究所附属細胞機能情報研究センター准教授	分子細胞生物学研究所講師
21.12.1 東原 和成	大学院農学生命科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
21.12.1 溝口 照康	生産技術研究所准教授	大学院工学系研究科附属総合研究機構助教
(配置換)		
21.11.16 浅間 一	大学院工学系研究科教授	人工物工学研究センター教授
21.12.1 根本 利弘	地球観測データ統合連携研究機構准教授	生産技術研究所准教授

* 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

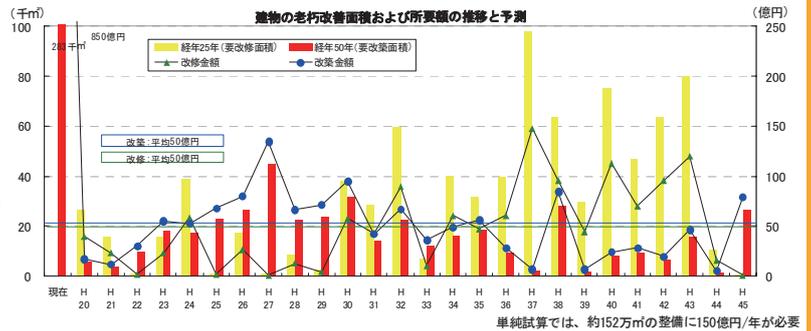
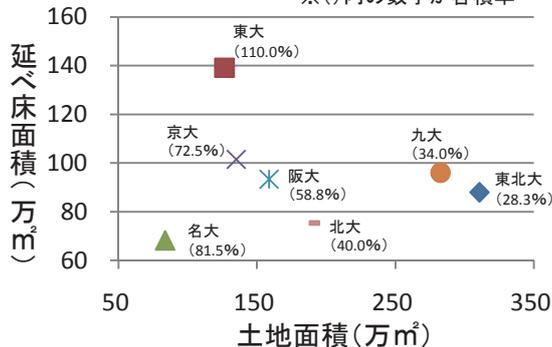
データで見る「東大のいま」 ～施設編～

東大は本郷キャンパスを中心として「歴史的環境の継承」と「魅力あるキャンパスの創造」により、世界レベルの学生・教職員の集積と、地域の活性化に貢献する使命を担っています。

しかしながら施設整備の課題も多く、下図のように主要キャンパスの容積率は東大が他大学を圧倒しています。建物の延べ床面積も多いのですが、それ以上に土地面積が少ないことが大きく影響しています。都心の狭い土地に建物が密集しているのが現在の東大の姿です。

また、保有している建物の維持改修にどれだけの費用がかかるかを試算したのが右上図です。東大が保有する、六本木ヒルズ二つ分の延べ床面積を維持していくためには、単純計算で年間150億円もの資金が必要との試算結果となっています。

7大学の主要キャンパス容積率
※()内の数字が容積率



東大の主要キャンパスは新たな局面を迎えています。

安全・安心のための耐震補強事業は、特に緊急性の高い建物の補強がほぼ終了しました。今後は、持続可能なキャンパスを維持していくために必要な整備を進めていくこととなりますが、重要な課題が3点あります。

1点目は、施設の維持管理

新たな局面を迎えたキャンパス整備

費用の確保です。歴史的な建物群など建設後50年以上過ぎた建物を28万㎡保有しています。適切な維持管理を行い建物を良好な状態で長持ちさせることが重要です。

2点目は「スペース」の確保についてです。

教育研究活動の進展に伴って新たなスペースが必要とな

ってきています。

主要キャンパスでは建設可能用地が少ないため、高層化しパブリックスペースを広げて潤いのあるキャンパスとする計画の推進、地下空間の活用及び大学周辺の民間ビル利用などを推進していくことが必要と考えます。

3点目は「タフな学生」対応や国際化の取り組み強化

を支援するための施設整備の推進です。

このほかにも解決すべき課題は多いのですが、全学的なバックアップのもと、着実に整備を進めていきたいと考えていますので、よろしくご理解とご協力をお願いします。

【前田正史理事(副学長)談】

東大トップページに 特設コーナー開設!

12月9日、トップページに特設コーナー「明日の日本を支えるために—教育研究の危機を越えて—」を開設しました。このコーナーでは、高等教育と学術研究が個人の生活、産業の力、国の力に直結しているという認識の下、中長期の戦略的ビジョンを踏まえた政策・予算編成が不可欠であるという問題意識に立ち、本学等が発信している情報を紹介しています。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/b01_10_j.html

特設コーナーで紹介している最近の主な動き

12月1日(火)、小柴ホールで総長講演会～「タフな東大生」とは～が行われました。濱田総長からは、社会の現実の中での大学のあり方について「ぜひしっかり考えてほしい」というメッセージがありました。

11月27日(金)、仙谷由人行行政刷新担当大臣が本学を来訪し、濱田総長と会談しました。濱田総長からは、今後の教育研究活動に関する教職員の不安や危惧を踏まえ、大学・学術関係予算の編成に向けた御理解をお願いしました。

11月27日(金)、医学部鉄門記念講堂で、大学や学術研究に関する国の動向と、大学への影響等について、濱田総長と前田理事(副学長)から教職員・学生等への説明会を実施しました。

濱田総長、前田理事(副学長)の説明に引き続き、教職員・学生との間で活発な質疑応答・意見交換が行われました。

11月24日(火)、学士会館で旧7帝大と早稲田大学、慶應義塾大学の総長・塾長が共同記者会見を開き、共同声明「大学の研究力と学術の未来を憂う—国力基盤衰退の轍を踏まないために—」を発表しました。

Contents

特集

- 02 大学発→学校行き
大学発教育支援コンソーシアム推進機構 (CoREF)
の活動
- 06 第8回ホームカミングデイ開催!

NEWS

- 08 秋の紫綬褒章受章
11 文化功労者顕彰

一般ニュース

- 13 高齢社会総合研究機構
東大、ソウル大、APRU共催で、高齢社会に関する国
際会議を開催
- 13 本部キャリアサポートグループ
知の創造的摩擦プロジェクト第9回交流会開催
- 14 環境安全本部
防災訓練(本部棟・第二本部棟)実施される
- 15 地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA)
第4回国家基幹技術「海洋地球観測探査システム」フ
ォーラム開催
- 16 本部学生支援グループ
学生企画「本郷キャンパス食環境改善プロジェクト」
14000人のメニューコンテスト試食会・授賞式開
催される
- 16 本部留学生支援グループ
株式会社アサツー ディ・ケイ会長と東京大学アサ
ツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生、本学関係者の
懇談会を開催
- 17 海洋アライアンス
第7回イブニングセミナー「大陸棚限界委員会の科
学と政治学」を開催
- 17 海洋アライアンス
平塚沖総合実験タワー開所記念講演会開催
- 18 本部奨学厚生グループ
「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成21年度
10月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催
- 19 本部人材育成グループ
東京大学教職員永年勤続者表彰式行われる
- 20 本部入試グループ
入試事務室の設置
- 20 本部入試グループ
平成22年度大学入試センター試験の本学割当数決
まる

部局ニュース

- 21 物性研究所
第3回東京大学堀場国際会議を開催
- 21 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属牧場で「牧場公開デー」開催される
- 22 社会科学研究所
ソウル大学日本研究所主催のシンポジウム「日本に
おける21世紀の高等教育像」に参加
- 23 大学院法学政治学研究科・法学部
バーベキュー・パーティを開催
- 23 大学院医学系研究科・医学部
医学部解剖体慰霊祭が行われる
- 24 医科学研究所
医科学研究所で動物慰霊祭行われる
- 24 東洋文化研究所
講演会「はじめての漢籍」を開催

- 25 空間情報科学研究センター
CSIS DAYS 2009を開催
- 25 大学院教育学研究科・教育学部
本田教授の特別授業が教育学部附属中等教育学校で
行われる
- 26 大学院教育学研究科・教育学部
教育学部創立60周年記念式典・祝賀会を開催

キャンパスニュース

- 27 本部学務グループ
平成21年11月1日現在学生数
一学部学生13,993人、大学院学生13,765人、研究生
等889人

コラム

- 29 PCリユースのわ 第2回
29 インタープリターズ・バイブルvol.29
30 Policy + alt vol.04
31 発掘! 総長室総括委員会 第18回
32 Crossroad 産学連携本部だより vol.49
33 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第46回
33 コミュニケーションセンターだより No.63
34 ケータイからみた東大 ~東大ナビ通信~

INFORMATION

お知らせ

- 35 退職教員の最終講義
35 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第525 (12月2日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——
- 35 大学院農学生命科学研究科・農学部
演習林の広報誌「科学の森ニュースNo.48」の発行
- 36 本部広報グループ
広報センターの年末年始休館のお知らせ
- 36 保健・健康推進本部
年末年始の業務について
- 36 情報基盤センター
新春の“情報探索ガイダンス”ご案内
- 37 大学院理学系研究科・理学部
第66回小石川植物園市民セミナーのご案内
- 37 本部入試グループ
平成22年度入学者募集要項配付
- 39 本部入試グループ
平成22年度入試に伴う臨時措置 (本郷キャンパス)
について
- 40 本部入試グループ
平成22年度入試に伴う臨時措置(駒場関係)について

事務連絡

- 41 人事異動(教員)

巻末特別記事

- 42 What's going on? 「行動シナリオ」 Vol.5

淡青評論

- 44 心理教育相談室の窓から

編集後記

◆ 表紙写真 ◆

医学部附属病院中庭の
クリスマス・イルミネーション

今号で2009年最後の学内広報です。今年度の学内広報は、コラムが増えたり、写真募集コーナーができたりと、より充実してきたのではないかと思います。また、こちらからの原稿執筆や特集制作のお願いに対し、快くご協力してくださった教職員の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。そして、この1年は公私ともに多くの方に支えられていることを感じた1年でした。来年も引き続きどうぞよろしく願いいたします!! (り)



七徳堂鬼瓦

心理教育相談室の窓から

大学に心理教育相談室という小さな施設があるのをご存じだろうか？ 弥生キャンパス総合研究棟の三階にある。一般の方々から広く心理相談を受けつけている。教育学研究科附属のカウンセリング機関であるが、三つの役割を担っている。ひとつは、相談に訪れる人の悩みと願いに応えるべく相談実践を粛々と続けるという、地域貢献活動を展開する小さな拠点たることで、二つ目は、実践を学術的研究へと高めてゆくこと、第三が、心理

相談を学ぶ大学院生たちに系統だった研修トレーニングを提供し、教育機会を開くことである。

歴史を紐解くと、1957年にゼミの研究・実践活動として始まり、1983年には文科省（旧文部省）が認可した相談機関となった。約半世紀前、社会貢献や開かれた大学という言葉がよく聞かれるようになるずっと以前に、実践型の学びを不可欠とし、そのための組織づくりを始めたことは、当時として特筆に値しよう。2009年現在、理論アプローチは多様化し介入法もはるかに複雑になったが、臨床実践とその丁寧な振り返り・検討によって相談の質を保障し、援助専門職の技能を高めてゆくスタイルは今なお変えずに続けている。

実践型学びの意義が、ある集団の声を直接に聞き、生きる現実にダイレクトに関わる点にあることは言うまでもない。個々の期待に応えつつ、背後にある彼らを、また我々を取り巻く社会システムの保護力、統制力を直に知ることが出来る。持ち込まれる相談内容の変化から、社会システムの変貌も感じ取ることになるが、発達障害という言葉が掲げた相談の激増ぶり、就労／復職へのプレッシャー、家族など親密な人間関係の確執の深刻化を昨今の傾向として挙げる事が出来る。共に暮らす集団の中に異質性を内包することが、頓に難しくなっているのではと想像せざるを得ない。効果や能率が強く求められる時代であり、多様性を尊重することは限りなく難しい。社会システムのマイナスの変化に棹さすという課題に、先端であり成果を誇る大学の相談室だからこそ、取り組んでゆきたい。

中釜洋子（大学院教育学研究科・教育学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1394 2009年12月17日

東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報グループ

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp